

校
本
篇

凡 例

一、校本の底本には、書陵部蔵五一・二八を用いた。本書ではこの五一・二八の略称を「桂」とする。底本の翻刻に際しては、漢字・変体仮名はそれぞれ通行字体に改め、また、上句と下句との間を一字分あげた。

一、比校に用いた伝本とその略称は次のとおりである。

甲 書陵部蔵五一・三〇六甲本

西 西本願寺蔵「三十六人集」

蓮 書陵部蔵五一・四二五蓮華王院本

禁 書陵部蔵五一・二三五禁裏本

乙 書陵部蔵五一・三〇七乙本

御 書陵部蔵五一・一二御所本

歌 正保版歌仙家集所収本

内 内閣文庫蔵三十六人集所収本二〇一・四三四

一、校合の規準は次のとおりである。

イ、底本と対校諸本との校異注記は、漢字と仮名・躍字等表記上の相違は扱わなかった。しかし、仮名遣いの違いは取り上げた。

ロ、対校諸本中の注書き入れは、原則として比校の対象から除き、必要と思われるものは上欄に記した。

ハ、校異の記載は、相違箇所第一字に該当する底本箇所と位置を合わせた。また、この規準に合わぬものは校異該当部分に傍線を付した。

ニ、校異は、原則としてすべて平仮名表記に統一し、直ちにその校異を有する該当伝本を略号を以って注記した。

ホ、但し、特に校異箇所を漢字表記のまま記した方がよいと判断した場合は、校異と伝本の略号とを区別するため、「家：甲」のように、校異と伝本の略号との間に「：」を加えた。

ヘ、校異の集中している箇所では、「たに甲—やま西」のように記した場合もある。

ト、また、同一伝本中に同一歌が二回以上収録されている場合は、「西100」のように伝本の略号の下にその伝本中の歌番号を加えた。

チ、諸本の本文中の校異は、「の」のように「イ」印を付してすべて掲げ、校異の右に傍記した。なお、幾つもの傍記が付されている場合は、適宜左にも傍記した。

リ、底本の本文中に明らかな欠脱のある場合、欠脱字を「○」で示した箇所もある。

ヌ、対校諸本中に該当部分の欠脱している場合は、底本脇の該当箇所に傍線を付して「の」のように「ナシ」と記し、その下に該当伝本を略号で示した。また、「○」で示した場合もある。

ル、底本及び対校諸本中の本文の補入箇所は、「○○」のように○印の右に傍記する形式にて示した。

ヲ、対校諸本中に、底本の詞書に該当する部分が全く欠脱している場合は、上欄に「詞書ナシ」と記し、その下に「一甲」のように「一」を加えて該当伝本を略号で示した。

一、連歌は短歌一首分の単位を以って歌番号を定め、前半部には「a」、後半部には「b」を付した。

一、対校諸本中の次の歌については、前半部には「a」、後半部には「b」を付した。

甲七〇 a かをとめてたれをらさらむゝめのはな

b かにこそにたるものなかりけれ

西一三二 a もとりのいろにはあらねともきくの花

b いろにいてゝもとしへぬるかな

西四三六 a いまはゝやなきもしぬらむほとゝきす

b あやなくけふをなきてかへらむ

蓮一三二 a もとりのいろにはあらねともきくのはな

b いろにいてゝもとしへぬるかな

蓮四三六 a いまはゝやなきもしぬらんほとゝきす

b あやなくけふをなきてかへらむ

禁一七六 a をとにのみきゝてねにしを菊のはな

b いろ〇^にいてゝもとしへぬるかな

御一七六 a をとにのみきゝてねにしをきくのはな

b 色にいてゝもとしへぬるかな

歌一三五 a 昔よりありのまに我すさひかは

b ぬれゝもなをほりやしてまし

歌一四六 a くらとしの雪とふらすは桜花

b ちるもいとかく思はましやは

歌二五七 a 思ひをは松のみとりにそめしかとは

b かくすりのあるかひもなし

歌三二五 a 梅花たゝにやはみる春雨に

b なのかりのみゆくこゝろかな

内二二三 a かりてほす山田のいねをほしわひて

b 守るかりいほにいくよへぬらん

乙一八〇 a をとにのみきゝてねにしをきくのはな

b いろにいてゝもとしへぬるかな

一、勅撰集の歌番号は、『新編国歌大観』（角川書店、昭和五十八年）の新番号に従った。

躬恒集

文永三年は一二六
六年。

文永三年六月一日光俊本を

(二葉白紙)

躬恒集上

詞書ナシ一甲歌

ナシ歌

みつねか内にたてまつれる

ナシ歌

獻大内廷歌三葉御乙
ふゆのなかうた内

1

ちはやふる 神なつきとや

けふよりは
はつしけれ甲歌

くもりもあへす

けふよりは甲歌
はつしけれ

1古今一〇〇五
2冬のながうた
3六帖四十五三六
4冬のながうた
5

もみちとゝもに

と御

ふるさとの

に甲

よし野々山の

山あらしも

お歌

ひことなむく
さむく日こ

に御乙

とに なりゆけは たまのをと^{き乙}けて こ^{か禁}き^{御乙}ちらし あられみたれて し

もこほり い^{はい禁}やかた^{きしく歌}まれる に^はのおもに むら^く見ゆる 冬くさの

うへに^{は内}ふりしく^{て禁} しら雪の つもり^{ナシ甲}て あらたまの とし^{ナシ甲}をも^{歌内}

おほく^{あ禁} すくし^{も甲}つる^{歌内}かな
あまた内

詞書ナシ一歌

また^{ナシ甲}これも^{ナシ甲}うちにたてまつれる
歌大内みしかうた禁御乙

わひ^{し甲}ゝとのおもふこゝろ^{は甲}を^禁ちる^{御乙}は^{ナシ甲}なに^{ナシ甲} そへて^{こゝろは禁}雲^{御乙}る^りに^禁ふき^{御乙}つけ^乙よかせ

一四ノ

四ウ・五オは白紙。

3 玉葉一八三(二)題
しらすじ

3 さくら^{を禁}はな^乙おりて^乙かさ^{ん禁}ゝ^{御乙}むくろ^乙か^{も禁}みの^にか^には^にれる^にいろ^にに^に見^えも^禁ま^{御乙}か^乙ふ^乙へ^かく^に
ら内
えやまかふと甲

10 かくわふる人はむかしもありやせし

か祭即

くにもみそめぬ祭即乙
みにもみそめの甲
人にすそめる神に
よをしりそめの歌
とはや歌
そしるらん祭即乙
あきそしるらむ甲

11 すくしこしとしをいくらかそふれは

こ甲
て祭即乙

ナシ甲歌
も甲歌
にけるかな甲祭即歌乙
ひ甲即

あきになりてよろこひやしたりけん歌

12 けふよりそうれしきをきくのうへに あまつそらよりおけるしらつゆ

は甲歌

ナシ甲

る即乙

を甲祭即歌乙

みをも歌

13 よにはねをわひてなくたにある物を うれしきにさへおつるなみたか

し甲

おほみゆきのうちたてまつる甲歌
うた歌

14 ふなおかのみゆきのちよはよるへなみ しつむとわひしものを思らん

を甲祭即歌乙

のち甲祭即歌乙

おもひもなし甲祭即歌乙

15 夫木第三(初句
「ちよをへて」)

15 としをへてみゆきあるへきふなおかの まつならぬ身のおひそかなしき

ちよ甲祭即歌乙

を甲祭即乙

は祭即乙

も甲歌

い祭乙

同：歌

老：歌

16 おくら山ひかりをちかみはれつゝそ みねのもみちはてりまさりける

を甲祭即

け甲

うれし甲

それしも祭即乙

ナシ甲

六ウ・七オは白紙。

「六オ

17 後撰一〇七
 (あはちのまつり
 ごと人の任はて
 のほりまうでて
 のころ、兼輔明臣
 のあはたの家にて
 ・三十六人撰

詞書「大井行幸」
 の部分、西本「て
 ほるにおはしませ
 るときにおはしませ
 るのたいのうた」・
 西本「ていしのみ
 かとのおほるにお
 はしまするとき〇
 ここのつのだいの
 うた」・禁乙御本
 喜七年寛平法皇御
 幸也」(延喜以下
 の部分は割注)・
 歌本「ていしのみ
 かとのおほるに行
 幸せさせたまへる
 ときのうた」
 詞書ナシ…甲

17

ひきうへし人はむへこそおひにけれ
 松のこたかくなりける哉

うきをきし禁
 うへをきし桂
 乙歌内

い甲内
 老歌

は禁
 とさのそうはて、まかりのほりてかねすけのきやうのあはたのいゝにまかりて桂乙歌
 あはちのそうのむはて、きやうにのほりてそのころかねすけの中なこんの家にて歌
 あはちのまつりとひとの任はて、のほりまうでてのころかねすけのあそんのあはたの家にて内

東校異頭注
 あき西強乙
 あきの禁御歌
 大井行幸かたみつにうかふ

おほるのみゆきにあきわかうかふといふころ甲

18

かはみつにもみちとうきてさしかへり
 身はけふよりそ〇なれそめぬる

このかは甲西強御歌乙
 うきと
 ともに強
 さし甲
 たち甲

み西強御歌乙
 た御
 さしめも
 さしかよひける甲

19

あきの浪いたくなたちそおもほえす
 うき木にのりてゆく人のため

あひ甲

ナシ西強
 あきのやまを見る

にのそむと西
 にのそむ強御歌
 にのそん乙

20

けふなれはおくらのやまのもみちは、
 そこさへてりて見えわたるらん

そ甲西強御歌乙

も甲禁御歌
 ら甲禁御乙
 よる西強

む甲西強
 かな禁御乙

調音ナシー甲

21 秋きりのはるゝまに／＼見わたせは 山のにしきは も甲 おりはてにけり
かけ祭歌乙
を甲祭歌 て祭歌乙

もみちおつ

し七う

22 みつ歌 にはのおものからくれなるになるまてに ま甲祭歌 秋にあひかねおつるもみちは あひ西
もあへす歌 か甲西遊祭歌乙

23 六帖六一五三六

23 かせにちるきゝのもみちはのちういに あき桂224甲199西遊祭121祭201歌96内 乙125乙205 ひ西
きし甲22歌57 を甲 る甲222甲199遊祭121祭201歌57歌96内 乙125乙205 に祭121歌121内乙125 そこ内 を祭121祭201乙125乙205 はし祭121歌121乙25 桂224甲22甲199歌57歌96内

24 より38の十五首は混入部分。

24 六帖六一二〇四 (作者名ナシ)

24 つきかけにいろわきかたきしらきくは よるのしらきくは西 し甲 を西 を西 おりてもおらぬこゝちこそすれ
折：御内

25 六帖六一一三〇

25 をみなへしひととゆへに秋の野 ナシ西 ちくさなからのはなを思かな
も桂初甲西遊祭歌乙 ものをこそおもへ内

26 古今一七一(四) しらず一よみ人し せう初句一わかし 一三〇・六帖一 一三〇・家持集・新撰

26 わかせて桂208甲 ころも桂208甲西遊祭御内乙 わきもこかうはものすそをふきかへし うらめつらしき秋のはつかせ

39 きく○はなけふをまつて昨日をきしお西 ナシ甲 つゆさへきえすはのさかりなりえ西迎禁御乙

40 君かためくろもしるくはつしもののこのりきく桂 394 禁 408 御 407 おきてのこせるきくにそありける桂 394 甲 迎 134 禁 178 禁 408 御 178 歌 乙

40 禁本 408 の二句三句は「くろもした(三字分空白)はつ」と記されている。

詞書ナシ一甲

つるたてりすにたてり西迎歌
すきたてり禁御乙

41 つるたてりかたにさりけるしろたへのあまのぬれきぬほすかとそ見るたつ歌のをる甲禁御乙 そあ禁御歌乙 ゆ…禁御歌 はみし禁御乙

41 夫木雄九(初句「船のおる」五句「ほすかと思へは」)

かりとふ

42 ふるさとおもひやりつとふかりのたひのくろはそらにそあるらし

42 37と重出。
一〇ウ・一一オは白紙。

43 秋ことにたひゆくかりはしら雲のみちのそらにやよをつくすらんみち内 たひ甲歌 なか西迎禁御内乙 はつくさむ西迎

43 枕後拾三二(「題しらず」)

やまのかひに甲歌 かゑになく西遊
さるなく

44 わひしらにましらななきそあし引の 山のかひあるけふにやはあらぬ
の○きそ西 のき西

44古今一〇六七
法皇にしかはに
おはしましたりけ
る日さる山のかひ
にさけふといふ事
を題にてよませた
まうける七・六帖
二一〇・和漢
朗詠四六一・大
鑑
(作者名ナシ)

45 こゝろあらはみたひ ふたゝひなくこゑを いとゝものおもふわれにきかすな
てふ甲西25西42西25西42
といふ禁御歌乙

46六帖三一三四
(作者名ナシ)

46 なれてこしおきのかもめもつけなくに のちのこゝろをいかてしりけん
くら西 そ禁御乙
かもめみつになれたり甲西遊禁御歌乙
は甲西遊禁御歌乙 ナシ甲
こん乙 らん禁 い甲 い甲
しりけむ禁 甲西遊乙

47六帖三一三三
(實之作・夫木難
九(三四句一まか
ふなりてまといは
かり)

47 すにをれはいさこのいろにまかふとり てにとるはかりなれにけるかな
き甲 さい
お西23 かの西23 うら西23
く御 ○〇西23
にの遊23

48玉葉二一九〇
一亭子院西川にお
はしましけるに
江松老といふ事を
仕うまつりける)

48 ふかみとりいりえの松もとしふれは かけさへともに お〇にけるかな
おみとりなる甲 へい禁 しけつれ西43遊43
にいしるんにしかはにおはしましけるに江松老といふことをつかうまつりける内
は禁
ナシ西26遊26 おひたり西26遊26
いり江の松
おいたり歌

48玉葉二一九〇
一亭子院西川にお
はしましけるに
江松老といふ事を
仕うまつりける)

48 ふかみとりいりえの松もとしふれは かけさへともに お〇にけるかな
おみとりなる甲 へい禁 しけつれ西43遊43
にいしるんにしかはにおはしましけるに江松老といふことをつかうまつりける内
は禁
ナシ西26遊26 おひたり西26遊26
いり江の松
おいたり歌
はふへいめうあり
おいにけるかな遊26
あひぬへら西43
おもへへら西43
おいにけるかな西26
めへら西43
い遊43歌内乙
い甲御 らしな歌
おしな乙

詞書ナシー内

50 拾遺一〇三六
 (題しらす)・六
 帖四一九七・歌合
 20三・袋草子・色
 目抄・宣蒙抄・色
 葉集・奥義抄・席
 経抄・十訓抄
 「みつね左万」底本
 甲本以外にはナシ。

51 新勅撰三六(亭
 子院の歌合に「六
 上是則作」・六帖
 二一四七五・興風
 作)・歌合20五・
 八登御抄・是則集
 ・興風集
 52 拾遺六四(亭子
 院の歌合に「六
 道抄四二・六帖六
 一六三九・歌合20
 一三・古来風林抄
 ・三十六人偶・貫
 之集。すべて貫之
 作。
 53 「〇れ」の〇は底
 本にあり。六帖六
 一六七四・歌合20
 一五

49 おいにける松もしるらんあゆかはの
ひ御
 むらむ西44
 むらん連414
 む西27西44連414御
 乙
 る歌
 ナシ西27 のかろ西44連414
 さりけらし西44連27連414
 さるけらし西27
 乙
 む甲

延喜十二年三月十八日亭子院哥合に二月

おなしあんのうたあはせのひたりかたにてよめる歌

わかあはせに御
 のわかあはせに辨乙

50 さかさらんものとはなしにさくらはな おもかけにのみまたき見えつゝ
む甲御内乙
 ゆらん歌内

みつね左方
ナシ甲

51 きつゝのみなくうくひすのふるさとは ちりにしむめのはなにさりける
み西御内
 り西
 そあ察154御154内

52 さくらちるこのした風はさむからて そらにしられぬ雪そふりける

53 はなさくら辨御歌乙
 さくらはなにかてか人のおりて見ぬ のちこそまさるいろもいて
を甲
 け甲
 〇れ
 こめ辨御歌乙

54 新後拾遺一三〇
延喜十三年
院の歌合の歌
六帖六・六四八・
歌合20二三

55 統後拾遺一五
延喜十三年
院の歌合
六帖六・六四八・
歌合20二五

一三才は白紙。

56 六帖六・七〇二
下句色ゆゑに
そ花も咲きけれ
代集
歌合20三三・万

詞母ナシ―西遊内

57 拾遺八(定文が
家の歌合に)
遺抄五・六帖一
二〇・歌合16二

延喜十三年ていしめんのうたあはせのうた内

を禁御乙

す甲内

54 うつゝにはさらにいはいはしきくらはな 夢にもちると見えはうからん
へ乙
れ禁御乙
む甲御乙

ていしめんのうたあはせに内

ナシ禁

く禁御乙

55 めにみえて風はふけともあをやきの なひくかたにそ花はちりける
くむ甲
かねと内

く甲

56 かけてのみみつゝそしのふむらさきに いくしほそめしふちのはなそも
の甲禁御乙
むる禁御乙

へい中將の家の歌
またふかいへの甲

へいちうかうたあはせにみつね右
はしめのはるみき甲禁御歌乙
はしめのきイ

仲…禁御乙
わか禁御乙

ナシ禁御乙

なを西園禁御乙
猶…甲歌内

57 春たちてけさふるゆきはむめのはな さくほともなくちるかとお見る
おもふ御乙
おもふ歌
おもめゆ禁

なかのはる

持…禁御乙

58 六帖一―五一・
歌合16四

58 はかなくて春ひとつきはすきにけり はなのさかりはすきかてにせよ
ぬめり甲
あ禁乙
た禁乙

59 古今一三二や
よひのつごもり
日花つみよりかへ
りける女どもを見
てよめるし・歌合
16六

60 拾遺九三三
らずしよみ人しら
ず・歌合16八

61 拾遺一六六
文が家の歌合に
・歌合6一〇・歌
合16一〇

62 29と重出。

はて歌
くれ禁即乙
すゑのはる

やよひのつごもりのひはなつみよりかへりけるをなんとをみてよめる内

59 ととむ
ととむへきものとはなしにはかなくも ちる花ことにたくふこゝろか
となはなしイ
ならなくに歌
乙

はしめの夏

60 山かつのかきねにさけるうの花は 誰しろたへのころもかけしそ
は禁即乙
え禁
ナシ甲

なかのなつ禁即歌乙
さたふんか家のうたあはせに内

61 ほととぎすたちかへりなけうなひ子か うちたれかみの五月雨の比
を甲禁即歌内乙 ね禁
れ即
わなもこか歌
そら歌内
こあ乙

はしめの秋

62 としことにあふとはすれとたなはたの ぬる夜のかすそすくなかりける

63 六帖一一六九
・歌合16一四

63

人しれぬねをやなくらんあきはきの

む甲西御118御166乙122

も禁166御166

はなさくまでにしかのこゑせぬ

そと遠禁118禁166乙122乙170
おと西
音：御118御166

持：禁166御166乙170

なかのあき：申歌禁166御166乙170

あはぬ戀

くれのあき持：禁御乙

1664 夫木健六・歌合
二二

64

あはんとはおもひわたれとふしかはの

ふものから申

る甲禁御歌乙

と禁御

ついにすますはかけもみえしを

65 後撰一〇二二

65

おもへともまたいひそめぬわか戀を

ひつゝ甲禁御歌乙

あはさるこひ禁御乙

おなしこゝろに人はしらなん

む甲禁乙

（はじめて人につかはしける）よみ人しらず）・六帖五一一三（作者名ナシ）・歌合16二四。

66 六帖五一六（作者名ナシ）・歌合16二八・八雲御抄

66

見ぬ人のこひしきやなそおほつかな

あひてのうち申

持：禁御乙

あひてのこひ歌

たれとかしら

ん歌

むゆめに見ゆとも

みろ歌

67 続後拾遺八三三（題しらす）・六帖三二〇四（作者名ナシ）・歌合16三二。

67

あひみての内

わかれてはのちそかなしきにこりえの

こひ甲内

そこともしらぬありかとふ身は

はとおもへは禁

はかとおもへは御

おもへは乙

詞書ナシ一歌

いま禁御乙 あはぬこひ甲
あひてのこひ

68 歌合16四〇
一四ウ・一五オは
白紙。

詞書ナシ―甲禁御
歌乙

68 ひたすらにわすれもそするわすれくさ ふる禁御乙 みすやあらましこひはしぬとも

あはぬこひ

69 歌合16二三

69 ひさにこぬ人をまつにやあえにけん へ御歌 乙御乙 ときはのこひとわれなりぬるは は歌 乙禁御乙

ナシ禁 乙

「みつね右」諸本ナ
シ、甲本の「右」
とあり

きくあはせの哥 ナシ甲 和：禁御乙 みつね右 ナシ甲

あき歌 十一：歌 たいりの歌 延喜十三年十月十五日たいりきくあはせに内 延喜十三年くさはせに内 は國歌 ナシ歌 うたいへんのおはせによりてたてまつる西國歌 三百：歌

70 新拾遺五九六
延喜十三年の癸
合にシ・六帖六
二〇二・歌合25一

70 きくのはなこきもうすきもいまゝても くさ内 しものおかすはいろを見ましや ナシ甲

71 六帖六一二〇三
・夫木冬・歌合25
一三

71 はつしもの くれ甲西國禁御歌乙 おきそめしよりきくの花 ふり甲西國禁御歌乙 なかりし 乙西歌 れ西 乙禁御乙 えたそまつそはりける まさ甲禁御歌乙

72 六帖六一二〇七
(作者名ナシ・歌
合25一四

72 もとよりのいろにそありときくのはな ナシ西國 乙甲西國禁御歌乙 乙禁御乙 かたえはうつすところからかも ナシ禁御 乙禁御乙

ナシ甲

ナシ西國

74 禁本中の「〇」の
はもとともとあり。

73 おとにのみきゝてねにしをきくのはな を甲禁御歌乙
ゆめにもいろはみえすなりにき ナシ禁御乙

74 あかすのみ見てとしへぬるきくのはな ナシ西遊禁御乙
いろにいてゝもおしまるゝかな 〇禁乙
としへぬるかな西遊禁御乙

75 あたなれとわれをはきくの花しもそ り甲歌
うつろふいろのこさまさりける に西遊禁御乙
のみ西遊禁御乙
は歌
ける西遊

詞書ナシ一禁御乙

人もとうたかうへをめぐらすうた ナシ甲歌
る甲
イ本 ナシ甲歌

76 ますかゝみそこなるかけにむかひみてみる ナシ乙
時にこそしらぬおきなにあふ心地

76 古今一三二
元水本・志須賀
文庫本・拾遺五
六五(旋頭歌)作
者名ナシ・六帖
六一五四六・和漢
朗詠七三二

すれ

77 えこそかの甲禁御乙 を禁歌乙
はゝきゝのおちかた人に物申す まう歌
もう御
われ ナシ甲
われものにイ
そこ そこに歌
そもそこ の甲禁御乙
に しろうさけるはなにのはなそも禁御乙
しろうさけるはなにのはなそも甲
しろうさけるはなにのはなそも歌
な はな
に この
花 花
そ そ
も も

77 古今一〇〇七
人しらす・よみ
しらす・六帖
四一五三九

81 古今三五八(内侍のかみの右大將藤原朝臣の四十賀しける時に四季のまかけるうしろの屏風にかきたりけるうた)・六帖六八八(案・新撰・三十六人撰・深窓秘抄・金玉・一六ウ・一七オは白紙。

82 拾遺一三六(右大將定國の四十賀に内裏より屏風賜じ給けるに)忠孝作・六帖一一一〇五・歌合六一二・忠孝集

83 古今三六〇(内侍のかみの右大將藤原朝臣の四十賀しける時に四季のまかけるうしろの屏風にかきたりけるうた秋)・拾遺一一二(右大將定國の家の屏風に)・六帖一一四五(案・作)・歌合六一六(神宮文庫本では作者名ナシ)・案性法師集

84 新古今五六一(菊をよめる)詞傳ナシ―西遊

85 拾遺一六(斎院御屏風に)・六帖御屏風に・和漢朗詠九五・三十六人撰・拾遺抄一五

た桂甲西遊禁御歌内

81 山ふかみ雲るに見ゆるさくらはな こゝろのゆきておらぬ日そなき
を甲西遊
く庭

七一六オ

延喜八年右大將藤原朝臣贈實屏風和歌・禁御乙

は西遊禁御乙

82 おほあらしのもりのした草しけりあひて ふかくもなつのなりにけるかな
を甲
に西遊
ナシ甲

右大將定國歌ひやうふに内

83 すみの江の松を秋かせ吹からに こゑうちそふるおきつしらなみ
きに甲

おなし十三年…歌

十三年…歌

内侍のかみの屏風哥

ナシ禁御乙
 きくをよめる内

かのひやうふのうた歌
 四十賀屏風うた禁御乙
 四十のか屏風わか西遊
 四十賀イ

84 あたらしく我のみや見んきくのはな うつらぬさきにこん人もかな
を西遊
む甲西内
ナシ甲
む甲
む西遊

おなし十五年…歌の甲歌乙

延喜十五年…歌の甲歌乙

禁御乙ナシ禁御乙

閑院御屏風うた

ナシ甲歌内
 故斎…禁御乙

わか甲
 に内

85 かをとめてたれおらさん梅のはな あやなしかすみたちなくしそ
を甲西禁内
む甲西遊御
ナシ甲

詞書ナシ―西304
479連304
仍禁即乙

女^{ナシ}とものむめのはな^甲おるにわかなつむ
みつゝ歌

86 六帖四―三三六
・夫木春一

はるの^{よ遠479}野^{上西479}にころもかたしきたかため^{か歌}に
ならはぬくさにわかなつむらん
む西304西仍禁即乙
ひ上西304連304
きる歌

ひときのもとにあり甲歌

上二七ウ

101 詞書ナシ―西101
延喜十七年屏風和哥秋
の甲西481連481歌

87 あつさゆみ歌
ゆきかへるはるのいへちをさりかたみ
このもとことにころをそやる
やまへ甲西連禁即乙歌
り西連禁即乙

あき歌 十五―西481連481禁即乙
おなし西481連481 即：西481連481禁即乙
うた歌 ナシ西481連481禁即乙
延喜十七年屏風和哥秋
の甲西481連481歌
さいるんの御ひやうふに内

「おなし……おち
たり」諸本ナシ

おなし齋院もみちかはにおちたり

88 拾遺―一三二
（齋院御屏風に）

88 みつのおものふかくあさくも見ゆるかな
もみちのいろそふちせなりける
はれ西481連481
そふち歌
上甲
なりける歌
成賢：内

詞書ナシ―甲歌

延喜十七年…禁即乙
そきやう殿御屏風うた
わか禁即乙
承香…禁即乙
むめのきのもとにひとるたり禁即乙

はる西152連152

89 拾遺一四(同御
時御屏風に・六
帖六・五九五・六
拾遺抄九

詞書ナシ一歌

89

ふるゆきにいろはまかひぬむめのはな

る西歌

かにこそにたるものなかりけれ

おなし十七年…西482
延喜のおほんとき御ひやうふに内

むめの木のもとに人ゐたり

はる西歌

90

おもひをは松のみとりにそめしかと

はな^{ナシ歌}のかりのみゆくこゝろかな

まつにかゝれるこけを見る

ナシ禁御乙

たるところ禁御乙

延喜十五年の御ひやうふのうた内

「女松本にゐたり」
諸本ナシ

女松本にゐたり

91

ちよをふるまつのみとりのこけみれは

とせ禁御乙
にかゝれる甲禁御歌内乙

な禁御内

としのをななくなりにつけらしも
るかな甲歌内

91 統古今一九二六
延喜十五年の御
屏風の歌・六帖
四・二九七(或本
・夫木雜十
一八九・一九オは
白紙。

詞書ナシ一禁御乙

秋のゝにこたか〇り
ナシ歌
か甲歌
す歌

92 底本中の○は本のまま。

92

人のこも

かるゝ甲禁御歌乙
かるゝといふ禁御乙
を甲禁御乙
女郎花：歌

きのもとに御乙
きのもとに禁

もとことになくすゝむしのこゑ

ナシ禁御乙

詞書ナシ内

たかる

あきのゝにたかり西遊禁御乙
するところ禁御乙

93

小歌
み甲西遊禁御乙
おやまたのおくてのいねをかりつみて

に遊
を歌

かり禁御

ほし西遊

まもるかりほにいくよへぬらん遊
まもるかりねにいくよへぬらん西
まもるかりにいくよへぬらん甲

まもるかりほにいくよへぬらん禁御乙
まもるかりねにいくよへぬらん歌
まもるかりにいくよへぬらん内

93 拾遺一・二五
延喜御時月次御
屏風のうた・六
帖二・二九七・夫
木秋三「みやま田
のおくてのいねを
かりつみてまもる
かりほにいくよ
へぬらん」
詞書ナシ西遊禁
御乙

もみちゝる

94 帖六・五三八
(作者名ナシ)

94

を西
おしめともつゐにちりぬるもみちゆへ

あき十二年：歌
延喜十八年五月：御
延喜十二年：甲

ふるあめかせ禁御乙
ふくあめかせ甲
ふかぬ風にものをおもふかな
かせふく乙歌
乙歌御
ナシ禁御歌
こそおもへ西遊

已上延喜十七年御によりてたまつる御屏風うた：西155遊155

女四宮の御屏風うた

女二の宮の御屏風なつ甲
女四宮屏風和歌：禁御乙
女二宮の御屏風のわかなへ歌
女四の宮の家の屏風に内

95

ゆくみちはまたとをけれとなつ山の

さき
す五内

このしたかせはすきふかりけり

けそ内
け甲禁御歌乙
たち甲禁御歌内乙
る内

95 拾遺一・二九
女
風のみこの家の屏
風に・六帖一
三九四

しはす甲歌

しはすイ

正月

96

このまより風にまかひてふる雪を

ち甲

はす甲

春くるてへは花かとそみる

といへ歌

ナレ甲

ゆ歌

L一九ウ

詞書ナシ―西題

ナレ禁御内乙

内御屏風和哥はしめのねのひ

うた禁御歌内乙
の甲歌 ナレ禁御歌内乙

97 六帖一―三九

97

ねたく我子日の松にならましを あなうらやまし人にひかるゝ

き禁御内乙

はなつみ

ナレ西題

98 六帖六一五〇一

98

うくひすはいたくなゝきそうつりに

めてゝ

のへ西

わかれ禁御
わかれ内
我…歌乙

むはなゝらなくに

くさあはせ

するところ歌

99 拾遺一〇三八
延喜御時月次御
屏風のうたし・六
帖六・六四五・拾
遺抄三九五

100 統古今一七三
三月つごもりの
日・藤花を延喜
御歌

101 拾遺一三三〇題
しらずしよみ人し
らず「そこきよみ
なかる」河のさや
かにもはらふるこ
とを神はきか南
・六帖一・一四
拾遺抄八四

二〇ウ・二一オは
白紙。

102 風雅四六〇七
月七日によみ待り
けるし・六帖一
一六・夫木秋一

103 拾遺一四二延
喜御時屏風歌
六帖一・一六二・
拾遺抄九〇

99 さくらはなわかやとにのみありと見は 金言：内
なきものくさはおもはさらまし に甲 う甲

三月つくるひ歌

100 あかすてけふのくれなは西庭 ん甲
けふくれてあすになりなはふちの花 に甲
かけてのみこそはるをしのはめ おしまめ甲

六月はらへ

つごもり西庭祭御内乙

101 そこみえてなかるゝみつのさやかにも ら甲西歌
はらふることを神はきかなん か西庭祭御内乙 け甲
む甲西庭御 も甲歌く甲歌

はやりしも西
はやけきも歌

七月七日 によみはへりける内286

102 なぬかひの歌 乙
けふははや祭御内286
けふのひは西庭 くもらさらなん西
七日の甲 くもらさらなん西
いとる日のはやもくれなんひさかたの とく祭御内286乙
あまのかはきりたちわたるへく た西
あまの よ庭

七日又：甲
延喜のおほんときひやうふうた内288

103 たなはたのつまゝつよひの秋かせに あさ祭
われさへあやな人そ戀しき あま御
ひこほしの甲西庭祭御内288 あま御

詞書ナシ―禁御内
乙

八月十五夜 六…西
日…歌

104 拾遺一七六(お
なじ・六帖一―
七五・拾遺抄一―
七五)

104 いくくにかな夜の月のでらさらん こ甲西禁御歌乙
みえ甲西連禁御歌内乙
む甲西 あかぬは人のこゝろなりけり

詞書ナシ―西連禁
御内9乙

しはす いねほしたり歌
延喜のおほんときつきなみ御ひやうふのうた内232 a

105 拾遺一―二五
延喜御時月次御
屏風のうた・六
帖二―四〇・拾
遺抄四一七

105 かりてほす山田のいねをかそへつゝ す歌
おほくのとしをつみてけるかな
お西内9
ナシ内232 a

かたへはところくなり

家…御
ひとのいふのやなきをおもひやりて桂234禁御
ひやうふのわか甲
しのひてかよひはへりけるひとのいふのやなきをおもひやりて西連
はる内

106 後撰四一(かよ
ひすみ侍ける人
家のまへなる御を
思やりて)・六帖
二―五〇三

106 いもかいへのはひいりにたてるあおやきに 西…御内
な桂234甲禁御
を桂234甲西連禁
を桂234甲西連禁
な桂234甲禁御内
なまこむ西
なまこむ西 いまやをくらんうくひすのこゑ

二二オは白紙。

一二二ウ

107 六帖六一三

107 いまはゝやたえはてなましくさのねの かれ
かれ甲西連禁御内乙
せんさいのおひたる甲
ナシ内
す禁御乙
む甲御
ふかな甲禁御内乙
ふかなイ
をまっかな西連 たえてもついに ナシ内
む甲御
ふかなイ
をまっかな西連 なるにあへるかも

108 後撰九「子日しにまかりける人にくれてつかはしける」・六帖四一三四〇

109 拾遺三〇「題しらず」・六帖一三八二 拾遺抄一六

110 六帖六一五〇二 西本蓮本・詞書の下に「三十六人」という注記あり。

111 古今六七「さくららの花のさけりけるをみにまうできたりける人によみてをくりける」・六帖六一四九九（作者名ナシ）・和漢朗詠一・二四・深窓秘抄・金玉・三十六人撰

112 六帖五一〇八

113 六帖六一六五（作者名ナシ）

ねのひにまかるひとにくれて桂24西蓮禁御

お西禁

108 春の野にこゝろをたにもやらぬ身は わかなはつまととしをこそつめ

つむ禁御

おひ甲
とし桂24西蓮禁御内

たいしらす内201

109 吹風をいといはてゝしむめのはな ちりくる時そかはまさりける

ひもはてし甲内20

なにいとひけむ西119西365西119連365乙
なにいとひけん禁御内201

110 花みれはうつるこゝろはいろにてゝ あたにあやなく人にしらるゝ

はるくれは西蓮

い甲西蓮禁御乙

出て内

く禁

さくらのはなみにまうできたるひとに桂23西蓮禁御

111 わかやとの はなみかてらにくる人は ちりなんのちそこひしかるへき

ナシ西蓮

ナシ西

む甲

112 春の野にあれたるこまのなつかすは くさはに身をもなさんとそおもふ

ナシ西蓮

ナシ西

む甲西禁

す禁御内乙

に西

113 あしひきの山ふきのはな山ならは さくらかりにはあふ人もあらし

ナシ甲

さ内

から西蓮禁御乙

さ甲

なくあまゝ甲

114 いづれとかわきておらましむめのはな えたもたをやにふれるしらゆき

を甲西蓮禁御内乙

を西乙

いゝ内

わゝ西蓮禁御乙

はゝ甲御内

115 いづれとかわきておらましむめのはな えたもたをやにふれるしらゆき

を甲西蓮禁御内乙

を西乙

いゝ内

わゝ西蓮禁御乙

はゝ甲御内

116 いづれとかわきておらましむめのはな えたもたをやにふれるしらゆき

を甲西蓮禁御内乙

を西乙

いゝ内

わゝ西蓮禁御乙

はゝ甲御内

117 いづれとかわきておらましむめのはな えたもたをやにふれるしらゆき

を甲西蓮禁御内乙

を西乙

いゝ内

わゝ西蓮禁御乙

はゝ甲御内

118 いづれとかわきておらましむめのはな えたもたをやにふれるしらゆき

を甲西蓮禁御内乙

を西乙

いゝ内

わゝ西蓮禁御乙

はゝ甲御内

115 六帖六・六四三

115

いまゝてもちらすはあらめとさくらはな なきも○とのみをもほゆるかな

に甲西遊禁御内乙
れと甲禁御内乙
むめのはな西遊禁御内乙
こ西遊
の甲西遊禁御内乙
お甲西遊禁御内乙
甲内 びけ西遊内

116

春たちていくかになりぬふるさとの かすかのゝへにきえのこるゆき

かりたちかへる甲
かりたちかへるイ
家：禁266御266
けシ禁266
家のふちのはなをひとのたちとまりてみはへりけるに桂242禁266御266
家：ふちのはなさけりけるをひとのたちとまりてみるをよめる内142
さけるふちなみ桂242禁266御266内142
むめ西遊禁24御24内35乙

117

わかやとにさきたるふちのたちめくり すきかたにのみ人のみゆらん

ち甲 はな甲
かへり桂242禁266御266内142
てにいぬる禁24御24乙
も西遊 る桂242西遊禁266御266内35内142
やまにはるめ内35
桂242甲禁266御266内142
む甲西遊禁24御24内266

118

山さくらふ○くるかせのぬれきぬは はなのこゝろときる人そほす

かせに甲 きつる甲
きいつる禁御内乙
しる甲禁御内乙
なき甲禁御
を甲禁御内乙

119

ふなをかに花つむ人のつみはてゝ さしてゆくかたいつくなるらん

お内 またん内
岡：御
かて甲西遊禁御内乙
たつね西遊乙
たつねん禁御内

120

しるしなきねをもなくかなうくひすの ことしのみちるはなゝらなくに

はなのちるをみて桂239西遊禁御内184

を甲内184
も桂239禁御内23

121

あひおもはてうつろふいろと見るものを はなにしられぬなかめするかな

を甲内184
も桂239禁御内23
あ桂239禁御内23
くりせ甲

120古今一〇〇(鶯
の花の木にてなく
をよめる)・六帖
一・二九(作者名
ナシ)・六帖六・
八四八
二三ウ・二四オは
白紙
121後撰五九(花の
ちるを見て)・六
帖五・一〇〇

122 古今八六（さくらのちるをよめる）
・六帖六―六四六

123 後撰一三二（さくらの花のちるを見て）
六四四

124 六帖六―五〇四

125 後撰六―六四・夫木春六

126 続古今一五一（春の歌とて）
六帖六―六八四

127 西本題本「三十人本のまゝ」といふ注あり。古今一三四（亭子の歌合のはるのうた）・歌合二四〇（十卷本賀朝恒作、廿卷本賀・和漢明録五六・深窓秘抄）

122 ゆきとのみ見るたにあるをさくらはな いかちれとかゝをのふくらん
かはり甲西題内24乙 せよ桂243甲西題12祭267御12御267内24内141乙 せよ桂243甲西題12祭267御12御267内24内141乙 ち桂243祭267御12御12内141 ち桂243祭267御12御12内141

さくらはなをみて桂240祭御 さらのはなをちへいぬるをみて西題

さくらはな桂240甲西題祭御内

いま西題内 いろ桂240祭御

123 いつのまにちりはてぬらんむめのはな おもかけにのみ かつは見えつゝ
に桂240甲祭御内 む桂240甲西 する甲

さくらはなをみて西題

124 ひさかたのそらもくもらてふるゆきは かせにちりくるはなにさりける
おはかたの内 り西題 せ内

125 春ふかくえたさしひちて神なひの かはへにさける山ふきのはな
は甲 り西題 せ内 たてる甲西題祭御内乙

126 ちりかたにあらましものをむめのはな またぬははなのつらきなりけり
るに甲西題祭御内乙 やまさく甲西題祭御内乙 山さくらイ あは内 そらし西 本 さらし西 祭御

三月つくるひ甲 ていしあんのうたあはせ西題

127 けふのみとはるを思はぬときたにも たつことやすきはなのかけかは
かたき西題

128 つねに我をしみかねぬる花ゆへに こゝらのとしをあかぬこゝろか
より西題 つ甲西題祭御内乙 あ乙 ナン乙歌 こり甲 ころかな西題祭御 甲西題祭御内乙 甲西題祭御内乙 あか西題祭御内乙

129 玉葉二八〇三
 ・春の歌の中に
 ・夫木春三

129 あけぬとも を西祭乙 おりやまとは か祭御乙 ん梅の む甲西遊 はな んめ乙 いつれともなくゆきのふれゝは き甲西遊祭御内乙

130 風 ひと内 にのみおほせやはて てや甲 んさくら花 む甲西遊 春のこゝろを は甲 し れる甲 んぬもの の内 か は らめ西遊祭御内乙 から から西遊祭御内乙

131 は し甲遊祭御内乙 なら はるもなにかは甲西遊 あらは お甲遊祭御内 なにか む甲西遊 は はるのなにかは祭御乙 ばる はるのなにかは祭御乙 のを お甲遊祭御内 し む甲西遊 から め甲西遊祭御乙 ん め内 くれ め ○とこそ を甲祭御内乙 は は西遊 今日 は西遊 も見 は西遊 まし は西遊 か

132 今日 ナレ内 くれて ナレ内 あすと ナレ内 たに ナレ内 な ナレ内 き ナレ内 は ナレ内 る ナレ内 な ナレ内 れ ナレ内 は ナレ内 た ナレ内 ま ナレ内 く ナレ内 を ナレ内 し ナレ内 き ナレ内 花 ナレ内 の ナレ内 か ナレ内 け ナレ内 かな ナレ内

詞書ナシ一祭御

ナシ甲西遊 歌乙
 御屏風 に甲 の ナシ西遊内

133 い は甲西遊祭御内乙 つ は甲西遊祭御内乙 れ は甲西遊祭御内乙 を は甲西遊祭御内乙 か は甲西遊祭御内乙 は は甲西遊祭御内乙 な は甲西遊祭御内乙 と は甲西遊祭御内乙 も は甲西遊祭御内乙 わ は甲西遊祭御内乙 か は甲西遊祭御内乙 ん は甲西遊祭御内乙 ふ は甲西遊祭御内乙 る は甲西遊祭御内乙 さ は甲西遊祭御内乙 と は甲西遊祭御内乙 の は甲西遊祭御内乙 か は甲西遊祭御内乙 す は甲西遊祭御内乙 か は甲西遊祭御内乙 の は甲西遊祭御内乙 う は甲西遊祭御内乙 へ は甲西遊祭御内乙 に は甲西遊祭御内乙 ま は甲西遊祭御内乙 た は甲西遊祭御内乙 き は甲西遊祭御内乙 え は甲西遊祭御内乙 ぬ は甲西遊祭御内乙 ゆ は甲西遊祭御内乙 き は甲西遊祭御内乙

133 新古今二二三題
 しらす乙
 二五ウ・二六オは
 白紙

134 さ ん祭御乙 く ん祭御乙 ら ん祭御乙 は ん祭御乙 な ん祭御乙 あ ん祭御乙 た ん祭御乙 な ん祭御乙 る ん祭御乙 も ん祭御乙 の ん祭御乙 と ん祭御乙 な ん祭御乙 に ん祭御乙 か ん祭御乙 い ん祭御乙 は ん祭御乙 ゐ ん祭御乙 我 ん祭御乙 見 ん祭御乙 る ん祭御乙 人 ん祭御乙 の ん祭御乙 こ ん祭御乙 ゝ ん祭御乙 る ん祭御乙 も ん祭御乙 そ ん祭御乙 あ ん祭御乙 る ん祭御乙

135 拾遺一〇〇〇
 (題しらす・六
 帖二一五七八

135

はるに逢と思こゝろはうれしくて いまひとゝせのおいそゝひける

はる西鑑

たつ内²⁸ おもふ西

ナレ西

ひ甲御

136 六帖五十八〇二
 (作者名ナシ)

136

しろたえのいもかこころもはむめのはな いろををかをそわきそかねつる

へ甲禁御乙

こゝろ内

に甲

に禁御乙

にも禁御乙

も甲内

137 六帖六十六四七

137

かせふかぬほとにおりてんむめのはな わかてからこそちらはふらさめ

を禁内乙

さくらはな禁御内乙

にて禁御内乙

ち甲禁御内乙

も甲

138

さくらはなゆめにやあるらんおなしくは また見ぬさきにちりそしなまし

き禁御

ナレ内

む甲御

139 六帖六十六八二

139

ちるとのみ見てやかへらんさくら花 はなのおもはんこゝろあるものを

は甲

さくらはな西鑑禁御内乙

やまざくら甲

ゆへおも甲

こゝろ禁御乙

ことも甲西鑑内

ものを西鑑

む甲通御

む西鑑

も禁御乙

140

さくら花ちるをもしうて月かけを ありとはかなくおもひけるかな

と甲西鑑禁御内乙

つかけを西の御

る西鑑

有内

141 六帖六一四九八

141

おきふしておしむかひなくうつゝにも ゆめにもはなのちるをいかにせん

を禁乙

き内

む西鑑

おしむ西

142 六帖六一五〇三
(作者名ナシ)

142 おしめはやはなのちるらん人を西乙にくむ甲西遊御もを甲のを内もいはてそ見るへかりけるり祭

あやにくにイ
あやにくに甲西遊御内
あやなくに祭
あやにくに乙

143 六帖五一五五九

143 はなる西遊ことにおしむにはあらずわきもこかやとな遊のさくらをえこそわすれねにひらくを乙

は甲西遊御内
にひらくを祭御

144 六帖六一六八
(作者名ナシ)

144 いかて我あはんとおもひし山ふきのり内はなのさかりのすきにけるかなを甲

わ内
む甲乙
をらむ西
おらむ遊

145 新古今六八(延喜の御時屏風に七・六帖六一六一七)

145 はるさめのふりそめしよりあをやきのいとのはなたこ内そいろまさりゆくける内

は甲
に西遊

146 六帖四一〇六
(作者名ナシ・歌合20一六(十卷本)野恒作・廿卷本作者名ナシ)

146 うたゝねのゆめにやあるらんさくらはなに西遊わかなく見てそやみぬへらなるは甲西遊御内乙

みえて西
みえて甲西遊御内乙

147 延喜千載一八六
(延喜の御時の御屏風に七・六帖六一六七(作者名ナシ))

147 ひとりのみみつゝそしのふやまふきのてこ西遊はなのさかりにあふ西遊御内乙とる人もなしくる甲

かな甲
そな遊内

148 新古今八(子院歌合歌)賀之作・六帖一四五二・歌合20一四二七ウ・二八オは白紙。

148 わかこゝろはるの山へにあくかれてなかくしひをけふもくらし甲祭御歌内乙

149 帖六六・
歌合20三

149 はるふかき〇〇こそなけれ山ふきの
いろ甲西遊禁即歌内乙
はな^{の内}に心をまつそ^そめつる
ころもを甲

150 玉葉二七〇題
しらす

150 さとはみなちりはてにしをあし引の
さかすけり禁即乙
山のさくらはまたさかりなり
ちかすけり西遊ナシ甲

151 ゆきと見てはなとやしらぬうくひすは
え禁
ふくはる風のまたさむきなつ
に本西遊
り甲西遊禁即乙

152 統後撰一四九
〇題しらす

152 なくとも花やはとまるはかりなく
や内
暮行春のうくひすのこゑ
もなく乙
〇なくも西
なくも甲
なくもイ
るもなく禁即内

153 帖六六四九
(作者名ナシ)

153 おし^{を禁乙}み^{み禁}する^{つ即内}わか^{ひ甲即}おいらくはさくら^{むめのはな甲}はな
かさしてのみそ^{いイ}おり^{ひ甲}わすれぬる^{け甲禁即乙}
をり禁内乙

154 帖六一五九七

154 むめのはなさきにけらしもことしより
な甲禁即内乙
よろつよふへきはるにあはんとて
かへりの禁即内乙
わ内

155 帖六一六五〇

155 わかことや人もみるらんむめのはな
さくらはな甲西遊禁即内乙
あくことしらぬいろにもあるかな
さ内
とも甲
ナシ禁
らし西

156 ふるゆきをむめにあらずとおほそらを わきてことく ちらはこそみめ
は甲
は西鑑内
の甲
し西鑑内乙
あらめ西鑑

157 春の日をいまいくかとおもはねは しつこくろしてはなをやはみる
か甲
は禁御
ナシ禁御

158 なにもせて花をそみつゝくらしつる 今日をしはるはかきりとおもへは
三月つくるを内301
つれく内301
み〇つ、禁
みつゝ、甲西鑑内68内301乙
け内68
の甲西鑑禁御内68内301乙

159 禁本中の「み〇つ」の〇はもとあり。
 新後拾遺一六二「同じ心を」・六帖一六二
 159 禁本「よしのふといふ本あり」という注記あり。

159 はるかすみかすかの山をたれこめて こゝろよはくやゆきを雪をふらせる
よしの西鑑
に内
ち西鑑御内
て乙
立禁
わ西乙
ナシ甲西鑑禁御内乙
ナシ甲西鑑禁御内乙
す甲西鑑禁御内乙

延喜のおほんときひやうふのうた三百うち西77 延77
 延喜十五年二月廿三日おほせによりてたてまつる御ひやうふのうたみつ西147 延147

160 わかやとのむめにならひてみよしのゝ 山のゆきをも花とこそみれ
ナシ禁
め内

160 西本147・西147「このうたはしにもあり」との注記あり。
 拾遺九「題しらず」よみ人しらず

161 むめかえになくうくひすのこあきけは 山には今日もゆきはふりつゝ
ナシ乙
は西
も西
は西
は西
は西

161 後千載一八「延喜の御時御屏風に」

はる西鑑

162 あひおもはぬはなに心をつけそめて 春の山邊になかめをそする
う鑑
めくらしつ西鑑

二九ウ・三〇オは
白紙。

163 おなしくはゆきてなめんさくら花 けふをすくさはよのましらぬを
ゆきとそしみむ西
む甲
そしみむ西
うらみん祭御
うらみむ内乙
レ二九オ
れぬ内

164 さくら花さけるをのへはおほけれと ゆかんかきりはなをゆきて見ん
お祭内 かとを甲
とを甲
とをイ
尾・御
とをくとも西遊祭御内
とほくとも乙
む甲遊
舞・申内
む甲西遊御

165 さくらはな おちくるみちのたへさは はやくちるともなけかましやは
を内
つ甲西294西416遊294遊416祭御内乙
なや西294遊294
を内
ちり西294遊294
ちり西294遊294
始・御
大・甲西294西416遊294遊416祭御内乙
さらまし西294西416遊294遊416祭御内乙
さらましイ
ナシ甲

166 うくひすのきつゝのみなくあをやきの うしろめたくもおらせつるかな
み内
は甲
を西
を西遊祭御内乙
を西
れ内
ナシ甲

阿寄ナシ西307西
418遊307遊418祭御内
78乙

さくらの花おもしろくさきたるところを見にまかりたる人のあり
ナシ甲
かりに甲
てしりたるひとに甲

けれはいひける

たいしらす内273

167 あちきなくはなのたよりにこと〇はゝ われさへあたになりもこそすれ
ナシ内273
あた甲
と甲
みさへあたにも内273
みさへあたに内78
めへきかな内273
めへらなり西307西418遊307遊418祭御内78乙
ナシ甲

167 玉葉一八八一
帖五十三二九
六

とほるは西307遊418
をりたれは西418
とほる〇は内273

詞母ナシ―西禁御
内乙通

かへし

168 六帖五―三二七
(作者名ナシ)

168 とはるゝに^{も西}あたにはあれ^{や内}とこの春は^{わかやとの西通} 花のたより^{に甲}そうれしかりける

詞母ナシ―西通禁
御内乙

花見に人々まかりて

169 院の歌合に

169 みつと^{る内}ても^{おら西}おしてあやなくかへり^{るには内}なは 風^{を甲内}にや花のまかせ^{あやな西通禁御乙}はてゝん^{む甲西通禁御}

170 なを^{お通}りて^{ほを乙}見てこそゆかめ花^{の西通禁御内乙}〇いろ^{か西通乙}を^{ナシ西}ちり^{む西禁}なんのちは何^{ナシ西}にかはせん^{む御}

171 〇は底本にあり。

171 は^{は通}なのいろを^{ナシ甲西通禁御内乙}みる〇にこゝろは^{いぬれとも西通禁御内乙}ゆきぬれ^{は甲}と^{き西通}いかて^{を内}なを^{む甲西通禁}てに^{すらむ禁}おらんと^{すらん御}そ思

172 六帖六―六九二
(一本)・夫木春四
・歌合36六作者名
ナシ)

172 あくさ^{つ甲西通禁御内乙}ゆみは^{かす西通禁御内乙}るの山邊^{ち甲禁御乙}にけふりた^{も内}つ^{ゆく内}もゆと〇^{も甲西通禁御内乙}みえぬひさくらは^{はな}な

やみなはやくをはみんはるさめの
ふるにたにこぬ
人のあるよを

174
 ナシ祭御乙ら祭
 たねしあれはおひにけらしはないはつゝし
 はなさく春にあはんとやみし
 岩三御いわ内乙
 も西祭御内乙
 ら西
 へ甲
 れ西
 む甲御
 わ内

175
 はるさめに君をやりてはあふさかの
はる西199遊199
 せきのこななに戀やわたらん
なたて歌 む甲西199西155
北の遊199
二三
オ

あをやきをかさしにさしてあつさゆみ
 と内
 春の山邊の西にいる人やたれ
 ある内

177
うくひすのゆくてにぬへるかさなれは
ナシ西
たのみてきたりあめやもりなん
しひより内
しまより甲西運解乙
やめ禁御乙
けん禁御乙
けん禁御乙
けむ西運乙

178

よにもみすたれかさけといふむらさきの花ゆへにこそはるものをしけれ

に甲西遊禁内乙

てふ甲西遊

五乙

ナシ西遊禁内乙

ナシ甲

かたれ西遊

お堀街

夏

179 六帖六一七二〇

ほとゝきすなとかきなかぬわかやとの 花たちはなのみになるまてに

あるところのさふらひにさけたへけるにめしあけられてほとゝきすのところ〇よめとはへりければ桂250祭御

ナシ御

ナシ御

〇まで西
よまで西

180

ほとゝきすこゑもきこえす山ひこのは ほかになくねをこたえやはせぬ

をんなに桂294祭御
あるところのさふらひにさけたひけるにめしあけられてほとゝきすよめとはへりければ西遊

は桂250祭御内

へ桂250祭御内

181

かれはてんのちをはし〇て夏くさの

ふ桂294
む西遊
む祭 こと西遊内

ふかくもひとのおもほゆるかな桂294祭御
ふかくもひとをたのみけるかな西遊
ふかくもひとをおもひけるかな内

180古今六八六(二)題
しらず(七)・六帖六
一(二)(作者名ナ
シ)・新統古今二
七八(二)夏の歌の中
に(七)・六帖六一
一。
「かりそめにたに
とふ人そなき」は
行間補入。

しけみのみひとにまさるなつくさの祭御乙
しけさのみひとにまさるなつくさの内

かりそめにたにとふ人そなき
の祭
のみ乙

182

卯花のうしや我身にほとゝきす

と内
は祭御乙
よ西遊
を内

三三三

もしそせに祭御乙
もしそせに西遊
もしそせに内
て祭
みむ西遊

183

いまはゝやなきもしぬらん郭公

しに内
にけ祭御内乙
む西遊乙

まつはつこゑを誰かきくらん
ナシ内
ナシ西遊
きけむ乙
きけん祭御内

184

郭公たれかはし〇ぬあやめくさ

ナシ西遊

あやなくけふをなきていくらん
も祭御
かへ西遊
む西遊祭御
ゆ内乙

185 ナシ禁乙
五月雨のたま○をはかりみしかくて
の甲西廬禁御内乙
つかつて西廬
ナシ西廬禁御乙
も西廬禁御乙
かねつる木あり西廬
つるかな禁御
ほともなきよをあかしかねつる
く内
も内

186 夫木經六
186六帖一十二五

みゝとかはきけとおほしくおほぬさに
つかな禁御
かくいふことをたれたのまん
と禁御
し内
む西廬乙

なつのさうのうた西28道28

187 玉葉一六二七
187五帖一六二七
帖一八九〇

五月雨にみたれそめにし我なれば
ら内
人を戀ちにぬれぬ日そなき
ても御
へらなり西28道28

188 三三ウ・三四オは
白紙。

戀すれは何かおもはぬ山くくの西廬
よるの西廬
山ほとゝきすなきつゝそふる
き内
ぬ禁御内乙
く西廬
ナシ甲

189 189六帖六一七〇二

かけてのみ見つゝそしのふ夏ころも
うすむらさきにさけるふちなみ
ナシ禁
ナシ甲

190 なつ草のしけみとひわけ郭公
やま甲禁御内乙
山イ
き甲
とに内
さとことになとすきわたるらん
な甲
ナシ甲
とひ禁御乙
こひ内
む御

191 191六帖六一四四〇
(作者名ナシ)

まさりてはわれそもへける夏むしを
え甲西廬禁御内乙
ます甲
は禁御
ひにかゝりとてなともときけん
た内
〇道
に西廬禁御内乙
む西廬乙
ナシ甲

192 六帖四一五七

192

五月雨にみたれやはせし
せまし西題あやめくさ甲西題祭御内乙
あやめくさいしや祭御
の丙か、西
は本題あやなし人もいまはわすれね
す乙す祭
め西題御

193 六帖一七八

193

むかし見しわかふるさとはいまもなを
も丙祭：御内うのはなのみを甲西題祭御内乙
そのはかなのみをイ

はなたちはなそめには見えける

194

な甲
こいゑ題はつこゑはわれにきかせよほとゝきす
を甲西題祭御内乙た甲なゝきを祭乙
つなきを西題
やこそを丙まつはたほかになかんとする
にをなかなむ甲
われにきかせよ西祭御内乙195 古今一六八
な月のつごもりの
ひよめるこゝ六帖
一一二四

195

はな
はつ題夏と秋とゆきかふそらのかよひちは
ナシ祭
に甲祭御乙
に西題内はすかたえ涼しき風や吹らん
へ甲西題祭御内乙
ナシ祭
に祭御乙む甲題

二三四ウ

196

としとに西題ほとゝきすこゑもかはらてとしことに
す題祭御内乙
ぬ西
わち題
ほとゝきす西題内あかぬこゝろやかくめつらしき
はめつらしきかな西題
うら祭御乙
とこ丙

197 六帖六八三

197

いもと
と西いものみぬるとこなつのはなゝれは
み西題つ祭
はひとに丙
もひとに祭御乙つ西題なへて人にはみせんともせず
む御丙うちにたてまつる甲
なかうた歌

198

わきもこか きる夏ころも しろたへに
え乙さけるかきねの 卯の花の
ナシ祭乙

202 六帖五一六三一

202 たまくしけあけかたにいし内する秋の夜な禁即のこゝろひとつをそ甲きためかねつるおさ西

み内は西遊禁即内乙

おさ甲
きたき
いびき

203 古今六三六しらすし・六帖五
・新朗
・小町集

203 なかしともおもひそはてぬむかしより あふ人からの秋の夜なれは

204 30と重出。

204 秋の夜のあかぬわかれやたなはたの たてぬき○にのみおもふへらなる

205 31と重出。

205 七夕にかしつるいとのうちはへて としのをなく戀やわたらん

206 24と重出。

206 月かけにいろわきかたきしらきくは おりてもおらぬ心地こそすれ

207 25と重出。

207 をみなへしひととゆへに秋の野ゝ ちくきなからも花を思かな

208 26と重出。

208 わかせこころものすそをふきかへし うらめつらしき秋のはつかせ

209 27と重出。

ことゝはゝくさきなりともうれしとは この秋よりやいはて思はん

210 32と重出。

210 君かよになかつきのきくもゝとせを けときときふるなをあかぬかな

211 33と重出。

211 きくのはなちくさのいろを見る人の こゝろさへにそうつろひぬへき

212 38と重出。

212 すきかてにのへにきぬへしはなすゝき これかれまねくそてとみゆれは

213 28と重出。
三七ウ・三八オは
白紙。

213 我のみそかなしかりける七夕は あはてすくせるとしゝなければ

詞書ナシ一歌

屏風哥

の甲西題
ナン甲禁御内乙

214 古今三〇五(卒)
子院の御屏風の
に阿わたらひとす
る人のもみちのち
る木のもとにひま
をひかへてにひま
をよませたまひけ
ればつかうまつり
けるし・六帖六一
五三四・三十六人
撰・九品和歌

214 うちわたり西題
たちとまりみてをわたらんもみちはゝ
む甲西題
の西題
あめとふるともみつはまさらし

222 きくのはな秋の野よな甲西廬から見ましかは 一夜もつゆはおきて見ましや本も西廬の甲即乙
よのなかく祭即乙
を甲連祭即乙

223 かはから甲西廬祭即歌内乙 水の上にしくれのみするあしろきは 紅葉さへ甲西廬祭即歌乙〇〇こそおちまさりけれる内
うちにまかりてはへりけるときよめる内
ふ甲西廬祭即歌内乙
に祭即内乙
へ祭即乙
はさへそ内

224 風にちる秋のもみちはのちついに たきの水こそおとしはてつれ

十五夜の月

225 あはちにてあはとくもるに見し月の ちかきこよひはところからかも

御乙 詞啓ナシ西廬祭
の甲
 内御屏風哥ナシ甲に歌

たいしちす内

226 たれか祭即 ゆき甲 も廬 なかれ行もみちのいろのふかけれは たつたの河はふちせともなし
ゆき甲も廬
ゆるく西廬祭即乙
ゆるか祭
け西
を内

226 下句行間補入。
 統古今五六五〇廬
 不知し
 三九ウ・四〇オは
 白紙。

223 新拾遺五八九
 宇治に籠りて待
 りける時よめる
 ・六帖三一・一九四

224 23と重出。

225 36と重出。

227 上句行間補入。
古今六六三(題し
らず)。六帖五一
一三七(作者名ナ
シ)

228 古今八四〇(は
ゝがおもひにてよ
める)

229 古今六六二(題
しらず)。後撰五
〇二(題しらず)。
よみ人しらず。
六帖一一七七三
(作者名ナシ)

230 下句行間補入。
古今四一六(かひ
のくにへまかりけ
る時みちにてよめ
る)。六帖四一四
四七(作者名ナシ)
・新撰
231 六帖一一七〇八
(作者名ナシ)。六
帖五一六四五

227 さゝのはに おきあるしものさむけれは しみはつくともいろにいてんやは
そくはつしものよをさむみ桂272解即歌内
めや桂272解即歌内
ナシ甲

はゝかおもひにてよめる内

228 神無月しくれにぬるゝもみちはゝ たゝわひ人のたもとなりけり
なみた内

229 ふゆのいけにすむにほとりのつれもなく そこにかよふと人にしらすな
をし甲
した歌
はん桂271甲解即歌
ナシ甲

かひへまかりけるとき桂286解即
かひのくにへまかりけるときみちにてよめる内

230 よをさむみおくはつしもをはらひつゝ くさのまくらにあまたたひねぬ
を桂286甲解即歌内
ナシ解
ナシ甲
へ桂286

はつゆき西題

231 くろかみのしろくなりゆく身にあれは まつはつゆきをあはれとそおもふ
な歌
し甲西題解即歌乙
ナシ題
ナシ甲
みる西題解即歌乙

躬恒集下

春立日
よめる内

232 後撰二(はる立
日よめる三・金五
・三十六人撰

232 はるたつときうつるからにかすか山 へ無御内 さええぬゆきのはなとみゆらん む御

こうはいをみはへりて のはなをみて内

233 くれなるにいろをはかへてむめの花 かそことく ナレ無 にうほはさりける

233 後撰四四(紅梅
の花を見て三・六
帖六十一〇(作
者名ナシ)・實之
集

人のいゑのやなきをおもひやりて

234 106と重出。

234 いもかいゑのはひりにたてるあをやきに いまやなくらんうくひすのこゑ

詞書ナシ一甲内

つきあかきよむめのはなをおりてと人のいひければ ナレ西題 たりければ西題

235 月よにはみれともみえすむめのはな る西題 し西題 香をたつねてそしる お甲 へかりける

235 古今四〇(月夜
に梅花をうりてと
人のいひければお
るとよめる三・
六帖六一五九八

たつねてそしるへかりける
しるへにておらはおりてん内

236 古今四一はる
の夜むめの花をよ
めるに六帖六一
五九三・和漢朗詠
二八・新撰・金玉

詞書ナシ甲内

四一ウ・四二オは
白紙。

237 古今三〇(麗の
とをきいてこし
へまかりける人
を)おもひてよめるに

236 はるの夜のやみはあやなしむめの花 いろこそみえねかやはかくるゝ

かりのこゑをきゝてこしにののかたに
をに西に廻まかりける人をおもひてに無因
とひて西廻

さ祭 はへりし西廻

し四一オ

237 はるくれはかりかへるなりしら雲の みちゆきふりにことやつてましけ西

さくらの花みにまうてきたる人に

238 川と重出。

238 わかやとのはな見かてらにくるひとは ちりなんのちそこひしかるへき

はなのちるを見て

239 121と重出。

239 あひおもはてうつろふいろもあるものを はなにしられぬなかめするかな

さくらはなちるをみて

240
123と重出。

240 摘
いつのまにちりはてにけむさくら花 おもかけにのみいろはみえつゝ

ねのひにまかるひとにをくれて

241
108と重出。

241
はるのゝにこゝろをたにもやらぬ身は わかなはつまてとしをこそつめ

いゑのふちのはなを人のたちとまりてみ侍けるに

242
117と重出。

242
わかやとにさけるふちなみたちかへり すきかてにのみ人のみるらん

はなのちるを

243 122と重出。

243 ゆきとのみちるたにあるをさくらはな いかにせよとか風のふくらん

かへるかり

244 後撰六〇(かへるかりをきつてしよみ人しらず)

244 かへるかり雲にわたるこゑすなり かすみふきとけはるのよのかせ

四三ウ・四四オは白紙。

延喜御時殿上人のをととも内のなかにめしあけられ てかおのくさしかきまし内にし侍しけるつゐて内に

四三オ

245 後撰九六(延喜御時、殿上のをのこどもなかにめしあけられて、をの／＼かざしを待けるついでに)

245 かさせともおいひも内かくれぬこのはるそ はなのおもてもは内ふせつへらなる

三月ふたつあるとし

うるふ三月あるつこりのひ歌
うるふ三月はへりけるつこり内

246 拾遺七八(閏三月待けるつこりに・拾遺抄五四)

246 つねよりものとけかりつるはるなれと けふのくるゝはあかす歌内おしくも辨御そありるかな御ける

247 古今一六四(は
とゝきすのなきけ
るをきこよめる)
・六帖六一八九三
如意宝集

ほとゝきすのなくをきゝて きける内
よめる内

247 古ほとゝきすわれとはなしにうのはなの うきかまに よのなかになきわたらん内 ねをもなくかな

となりよりとこなつこひにをこせて待けるに とこなつのはなを内
お内
たりければをしてみてこのうたをよみてつかはしける内

248 古今一六七(と
なりよりとこなつ
の花をこひにをこ
せたりければおし
みてこのうたをよ
みてつかはしける)
・六帖六一八二(作
者名ナシ)・和漢
朗詠二九九

248 ちりをたにすゑしとそおもふうへしより いもとわかぬるとこなつのはな へ脚内
ふ祭
さき内

たいしらす内

249 おふれともこまもすさめぬあやめくさ かりにも人のこぬかわひしさ す四題
き西祭脚内

249 拾遺七六八(題
しらす)
・拾遺抄
二七五

あるところのさふらひにさけたへけるにめしあけられてほとゝき

すの心よめと侍ければ

250 180と重出。

250 ほとゝきすこゑもきこえすやまひこは ほかになくねをこたへやはせぬ

かりのなきけるを きゝてよめる内251 うきことをおもひつらねてとふかりの かりかねの内 秋のよな／＼なきこそわたれ なきこそわたれあきのよなよな内251 古今二一三(か
りのなきけるをき
ゝてよめる)・六
帖六・八二九・伊
勢集むかしゝれりける人に秋のゝにあひて あひしりてはへり内 の内 ものかたりしけるつゐてよめる内252 秋はきのふるえにさけるはな見れば もとのころはわすれさりけり る所252 古今二一九(む
かしあひしりて待
ける人の秋のゝに
あひてものがたり
しけるついでによ
める)・六帖六・一
〇三いけのほとりのもみちを にて内 のちるをよめる内

し四五オ

253 かせふけはおつるもみちはみつきよみ ち内 さらぬかけさへそこに見えつゝ253 古今三〇四(池
の辺にてもみちの
ちるをよめる)・
六帖六・五三七

をみなへしおほかるところにて

254 をみなへしにほふさかりをみるときそ 我おいらくはくやしかりける

254後撰三四七(前
裁にをみなへし待
ける所にて)よみ
人しらず)

おほかるのへを歌
は即
ひ即
や即

255 猶たなはたにゝたるはなかなをみなへし あきよりほかにまつこともなし

255後撰三四四(題
しらず)・六帖六
一三三

おほかるのへを歌
は即
ひ即
や即

256 秋の野々によるもやねなんをみなへし 花のなをのみおもひかけつゝ

256後撰三四五(題
しらず)よみ人し
らず)

ナシ禁ナシ禁御歌

257 をみなへしいろにまあるかなまつむしを もとにやとしてたれをまつらん

257後撰三四六(題
しらず)よみ人し
らず)・六帖六一
一三八(紫性作)

し御
る禁御歌
な歌
む御

人のかりはきぬらんといふをきゝ侍て

にけり内
まうす内
ナレ御内
む御

258 猶としことにくもちまとはすかりかねは こゝろつからやあきをしるらん

258後撰三六五(人
のかりはきけり
と申すをきゝて)
・六帖六一八二六

ぬ内
む御

おほうわにまかれりけるにかれこれもちにて

259 あまのはらかりそめとわたるさをやまの もみちはむへもいろつきにけり

259 後撰三六六(や
ま)にまかりける
時、かれこれと
にてよみしら
ず。六帖六八
二七

詞書ナシ 西歌選

人のいゑのはきを
歌：祭即
たいしらす内

260 つゆわけてわかころもてはぬれぬとも
けくて西歌内
め祭
を西祭
おりてをゆかん秋はきの花
折：歌

260 拾遺一八二(題
しらず)。拾遺抄
一一一

詞書ナシ 内

九月九日

261 なか月のこゝぬかことにつむきくのはな○かひなくおひにけるかな
も祭即内
い祭内

261 拾遺一八五(題
しらず)。拾遺抄
一一三

たけかは西162 歌
たいしらす内

262 もみちはのなかるゝときはたけかはのふちのみとりもいろかはるらん
と西59
ナレ西162
りぎり歌
わ内
む選59 祭即

262 拾遺一一三
(たいしらす)。
拾遺抄四一四

263 拾遺一〇九九
（廻しらず）拾遺抄四二二

四七ウ・四八オは
 白紙。

あき西遊

263 あきのゝのはなのいろ／＼とりなへて わかころもてにうつしてしかな
す西遊
 四遊
 歌

九月卅日
みそかに内

264 後撰四四二（お
 なじつごもりに
 ・六帖一・二〇三

264 いつかたによはなりぬらんおほつかな あけぬかきりはあきとおもはん
も後撰
 四四二
 内

おなしひ

なかつきごもりのひよめる内

265 古今三三三（お
 なじつごもりの日
 よめる）・六帖一
 一・二〇二・新撰

265 みちしらあ四はたつねもゆか四内ゆかいかなむもみちはを ぬさとたむけてあきはいぬめり
ん後撰
 内
 にけり内

ゆきふれるを見て
の四内
 よめる内

266 雪ふりて人もかよはぬみちなれや あとはるもか後撰
 四内なくおもひきゆらん
む後撰
 内

266 古今三三三（四
 のふれるをみてよ
 める）・六帖一・
 七・二九（作者名ナ
 シ）

267 古今三三八(も
のへまかりける人
をまちてしはすの
つこもりによめる
・六帖六一二六・
如意宝集

詞書ナシ一歌

268 拾遺一四四〇
〇冬おやのさうに
あひて侍ける法師
のもとにつかはし
けるこ・拾遺抄五
五四

269 後撰一〇〇
〇月のおもしろか
りけるをみてこ・
六帖一―三二九

しはすの廿よ日ものにかかりにける人をおもひやりて
はつかよる辨御
ものへまかりけるひとをたつねてしわすのつこもりによめる内

267 わかまたぬとしはふれともふゆくさの かれにし人はおとつれもせず
きぬれと内
を辨御
音低内
ぬ御

おやのおもひ侍ける人につかはしける

ふゆのひとにおくる西題
ふゆおやのさうにあひけるはふしのもとにつかはしける内

268 拾もみちはやたもとなるらんかみなつき しくるゝことにいろのまされば
む西御
さ歌
は歌
る西題

し四八ウ

の歌内
月おもしろ〇夜
き歌内歌
きに御歌
かりけるをみて内

269 ひるなれやみてまとひぬる月かけを けふとやいはんきのふとやいはん
そ歌内 か歌内
へける内
わ内
わ内

とさのそうはてゝまかりのほりてかねすけのきやうのあはたのい

ゑにまかりて

270 17と重出。

270 うへをきし人はむへこそおひにけれ まつのこたかくなりけるかな

詞母ナシ—西遊

みつにやとれる月を

たいしらす歌
ひやうふのゑに内

271 拾遺四四〇(屏風のゑに)・拾遺抄五〇四

271 ひさかたのあまつそらなる月なれと いつれのみつにかけなかるらん
の西遊 やと内 む西御

たいしらす内

272 拾遺四五〇(題しらず)・拾遺抄五一〇

272 おほそらをなかめそくらすふくかせの
う遊 をとすれともめにしみえねは
こゑ西遊 も西 音：内

おなし御時しつめるよしを思ひてあるくら人につかはしける

273 4と重出。
四九ウ・五〇オは
白紙。

273 いくへもはるのひかりはわかなくに またみよしのゝ山はゆきふる

し四九オ

ひえの山のおとはのたきを
ナシ内 を禁御内 よめる内

274 古今九二九(お
 なしたきをよめる
 ・六帖三一二六五

274

かせふけとところもさらぬしらくもは
わかす禁御 の禁御 よ禁御内 に禁御
 かをへておつるみつにさりける
わかれ内 せあり

山ほろしに

やまでらにあるくひとやる西遊
 よをうらみでやまでらにまかるひとにつかはす歌
 やまのほふしのもとへつかはしける内

275 古今九五六(山
 の法しのもとへつ
 かはしける)

275

よをすて山にいる人やまなから
うしと西遊歌 にても内

またうきときはいつちゆくらん
なそい また禁 また西遊歌 なそとも また内 む西御

ものおもい侍けるころいとけなきこをみ侍りて
ひ禁御内 とき内 き内 てよめる内
ナシ内

276 古今九五七(物
 思はべりける時
 とときなきこを見て
 よめる)・六帖六
 一五七七

276

いまさらになにおひつらむたけのこの うきふしけきよとはしる
い内 ん禁内 らすや内

ともたちのひさしくとはぬに
う禁御内

まうてこさりけるもとによみてつかはしけり内

277 禁本「おもに
九代」という注記
あり。
古今九七六(とも
だちのひさしうま
うでござりけるも
とによみてつかは
しける)」

278 古今九七六(人
をとではひさしう
ありけるおりにあ
ひうらみければよ
める)」

279 後撰一 一八六
おもとより友だち
に待ければ、つら
ゆきにあひかたら
ひて、兼輔朝臣の
家に名づきをつた
へさせ侍けるに、
そのなづきにこそ
へてつらゆきにを
くりける。六帖
六一三三、六帖

277 みつのうへにおふるさ月のうきくさの うきことあれやねをたえてこぬ

ひとをととはてひさしうありて けるそりにあひうらみければよめる内

278 身をすてゝいにやしにけんおもふより ゆき内 ほかなるものはこゝろなりけり た内

つらゆきにあひかたらひてかねすけのきやうになつきとゝはせ侍 ナレ禁御

けるにつらゆきにをくり侍ける

もとよりのとくいにはへりければかねすけのきやうにたてまつるなつきをつらゆきしてつたへさすとしてつかはす歌
もとよりともたちにはへりければつらゆきにあひかたらひてかねすけのあそんの家になつきをつたへさせはへりけるに
そのなつきにはへてつらゆきにをくりける内

はあ禁御歌内

の禁御歌内

279 ひとにつくたよりたになしおはらきの もりのしたなるくさ○身なれば

しりたる人のこしよりまかりのほりてまかりかへるに
あひしれりけるひとのこしにへまかりてこしへてきやうにまつてきてまたかへりけるときよめる内

280 古今三八二(あ)
ひしれりける人の
こしのくにまか
りてとしへて京に
まうでて又かへ
りける時よめる
・六帖二二七(い)
ちはらのおほ君作

280 かへるやまな^{に内}そはありてのあるかひは^{ナシ内} きてもとまらぬなにこそありけれ

おなしかたにまかる人に

こしのくにへまかりけるひとによりてつかはしける内

281 古今三八三(こ)
しのかくにへまかり
ける人によりてつ
かはしける

281 よそにのみこひやわたらん^{む舞御}しくもの^{やま内} ゆきみるへくもあらぬわか身は^{む御}

は歌
つ精

かつみのわうにあひ侍けるとき

かねろのおほきみにはしめてものかたりしてわかれけるときよめる内

五一ウ・五二オは
白紙。

し五一オ

282 古今三九九(か)
ねみのおほきみに
はじめてものがた
りして別ける時
よめる・新撰

282 わかるれとうれしくもあるかこよひより^{西内} あひみぬさきになにをこひまし

こしに^{のくにへ内}まかりけるときしらやまを^{に御} ^{みてよめる内}

283 古今四一四(て)
けるのくにへまかり
ける時しら山を
よめる・六帖
一七三八(作者
名ナシ)

283 きえはつるときしなけれはこしちなる^{ナシ解} しら山のなはゆきにそありける

284 古今九七八(むねを)
ねをかのおほより
がこしよりまうで
きたりける時に雪
のふりけるをみて
をのが思ひはこの
ゆきのごとくなん
つもれるといひけ
るおりによめるこ
・後撰一〇七一
へしらゆきのつも
る思ひもたのまれ
ず春よりのちはあ
らじとおもへば
返し、よみ人しら
ず
285 古今九七九(返
し宗匠大頼作)

むねをかのおほよりかこしよりまうてきてものかたりなし侍け

たりけるとき内

るに雪のふり侍ければをのかおもひはこのゆきをなんつもると

けるをみて内

お禁御

のことく内

れ内

か御
申
中
いひ

ければ

けるをりによめる内

284

きみかおもひゆきとたまらはたのまれす

つも禁御内

はるよりのちはあらしとおもへは

返おほより
むねをかのおほより内

285

君をのみおもひこしちのしら山はいつかはゆきのきゆるときある

かひへまかりけるとき

286
230と重出。

286 よをさむみをくはつしもをはらひつゝ くさのまくらにあまたゝひへぬ

しわすはかりに内 へ内
十二月やまとにことにつきてまかりけるやとりたりけるいゑのむ
に禁御 てはへり内 ひとの家…内
けるほとに内 家…御

内本の「や〇こと
云々」の〇は原本
のまま。

すめを思ひかけて侍ければいそきてまかりのほりければまたのと
や〇ことなきとによりて内 けり内
に内 ける内
と内 みる内
あくる内

しの春おやのかりやりせるに
け禁御 ナシ御
もとにつかはしける内

287 かすかのおふるわかなをみてしより こゝろにつねに思ひやるかな
を内

287 後撰一三二しは
す許にやまとへ
事につきてまかり
けるほどにやど
りて侍ける人の家
のむすめを思ひけ
て侍けれどやむ
ことなきことによ
りてまかりのぼり
にけり。あくるは
るおやのもとにつ
かはしける

をんなに

288
200と重出。

288 はつかりのこゑをはつかにきゝしより なかそらにのみものをおもふかな

289 古今五八〇(題
しらす・六帖一
ナシ)
ナシ)

289 あきゝりのはるゝときなきこゝろには たちゐのそらもおほえさりけり る即

290 201と重出。

五三ウ・五四オは
白紙。

290 むつこともまたつきなくにあけにけり いくをあきのなかにしてふよは

五三オ

291 古今五八四(題
しらす・六帖二
一・二八九・新撰

291 ひとりしてもものをおもへはあきのたの いなはのそよといふ人もなし は解の内く即
き内

たいしらす内

292 古今六〇〇(題
しらす・六帖六
一四三九

292 なつむしをなにかいひけんこゝろから われもおもひにもえぬへらなり

おなしとこころに みやつかへしはへりてつねにみならしけるそんなにかはしける内
みわたりける女に

293 後撰七四四(お
なじ所に宮づかへ
し待て、つねにみ
ならしける女に
かはしける)

293 いせのうみにしほやくあまのふちころも なるとはみれとあかぬ君かな す内は内

女に

294
181と重出。294
かれはてふむのちをはしらてなつくさの　ふかくも人のおもほゆるかな295
28・213と重出。295
われのみそかなしかりけるけひこほしも　あはてすぐせるとしゝなければ296
203と重出。296
なかしともおもひそはてぬむかしより　あふ人からの秋のよなれは

し五四ウ

297
229と重出。297
ふゆのいけにすむにほとりのつれもなく　そこにかよはん人にしらすな298
298 内本中の「おもひね〇」の〇は原本のまま。古今六〇八(題しらず)・六帖四一八五298
きみをのみおもひねに〇×内ねしゆめなれは　わかこゝろからみつるなりけり
なつむしを内
せ原四内299
299 古今六一(題しらず)・六帖四一(作者名ナシ)・和漢朗詠七五・深窓秘抄・金玉三十六人撰299
わかこひはゆくあもしらすはてもなし　あふをかきりとおもふはかりそ300
300 古今六一(題しらず)・後撰九六七(びさしくいひわたりけるに)つれなくのみに待れば・葉平作・六帖五十四二・葉平集・伊勢集・伊勢物語・深窓秘抄300
たのめつゝあはてとしふるいつはりにの内　こりぬこゝろを人はしらなん
む原内

301 古今七五〇(題
しらす)・拾遺九
九五(題しらす)
よみ人しらす)
六帖四一三(作
者名ナシ)・如
宝集・恒明集

302 後撰一〇八四
(我をしりがほに
ないひそと女のいひ
て待ける返事に
・六帖六二七五二
(作者名ナシ)
五五ウ・五六オは
白紙。

303 古今七九四(題
しらす)

304 拾遺一〇八一
(題しらす)・拾
遺抄四〇六

305 拾遺一〇九四
(七夕後朝にみつ
ねがもとよりうた
よみてをこせて待
ける返ごとに)
らゆき)・六帖五
一三〇(四ウ)
拾遺抄四〇七(説
人不知)・四之集
306 古今一〇三五
(題しらす)

301 わかことくわれをおもはむ人もかな してもやうきとよをこゝろみん
ん禁即内

われをしつかほにいふなといふ女に
り禁即歌内 ないひそ内 ひはへりける歌
にひとに歌 をんなのいひてはへりけるかへりこと内

302 あしひきの山におひたるしらかしの しらしやひとをくちきなりなん
い禁 す歌 とも歌内
生内 な内

303 よしのかはよしや人こそつらからめ はやくいひてしことはわすれし

304 いたつらにおいぬへらなりおほあらしの もりのしたなるくさにはあらねと
ひ即 は西題 ナシ禁即
かへしつらゆき歌 ナシ歌内 な歌内
ならねとも西題

305 あひみすて一日もきみにならはねは たなはたよりもわれそまされる
あ即 ナシ歌

306 せみのはのひとへにうすきなつころも なれはよりなむものにやはあらぬ
たいしらす内 と即 ん禁即内 ならなく内

308 六帖一三三七三
 (作者名ナシ)
 307 友則作・六帖五
 一三九(作者名
 ナシ)・歌合5一
 五四(友則作)・新
 撰(友則作)・二八
 要抄(友則作)・友
 則集
 306 古今五六五(寛
 平御時きさいの宮
 の歌合のうた)・紀
 友則作

ふかやふひとさねくしてたいみつを卅首つゝよみ侍けるに人しれ

か
 篠
 御

ぬこひを

307 かはのせになひくたまものみかくれて ひとにしられぬこひもするかな

308 わかこひはそらなるほしのかすなれや としはへぬれとしる人のなき

309 人しれぬこゝろのうちにかれつゝ くれて御 ひとにしられぬこひもするかな

し五六ウ

310 さよふけてなくかりかねにあらなくに 人にしられぬこひもするかな

311 ひとしれぬおもひするかのふしのねの もえつゝのみやこひわたるへき

316 新勅撰六四八
 帖二一四三(作
 者名ナシ下句ほ
 かに出ぬ恋はくるし
 かりけり)賀之集
 五七ウ・五八オは
 白紙。

312 山たかみくすのしたゆくたにみつの人にしられぬこひもするかな

313 ひとしれぬこひやなになりもかいふねり禁 こかれわたれとかひしなけれは

314 よしのかは○○○○○ナシかくれたるき禁 ふかき心をしる人のなさ

315 おもふこといはまほりえにおふるあしのみたれてこふと人しるらめや

316 山かけにつはるく内やまたのみかくれてわき内ほにいてぬこひみ内によをやつくさん

し五七オ

317 をとにのみならしのをかのほとゝきすこゑにはなけとしる人もなし

318 おほつかなそらとふかりのをとにのみきゝつゝ人をこひやわたらんむ禁

319 新古今一四一五
 (題不知)

319 新古今
 くもゐよりとほ山とりのなきて行 こゑはるかなるこひもするかな
を禁御 遠…内

320 新古今一〇一八
 (題不知)

320 おく山の御のみねをナシ内とひこしくゆる内はつかりの はつかにたにもみてやゝみなん

こひのうたとて内

321 玉葉一三一五
 (恋の歌とて)

321 あふことをいまやくとまつきの ときはに人をこひわたるかな

322 こひわたるころもやらんあひにきと なきなをたにもたゝせてしかな
え御

323 こひくゝてあはすなりなはあしたつの みちくるしほにぬれやわたらん
は禁御 ふ禁

し五八ウ

324 あふことをいまやくとまつかせの をとにのみやはきゝわたりなん
と禁

325 たかつけしおもひなれはかいなひのゝ よそにのみわかこひわたるへき
や御

326 底本中の○は
本のまま。

326 なかれて○あふくまかはをわたらすは あはのうき身とおもふはかりそ
も禁脚 め脚

327 みてこそはうれしきこともありときけ かねてもまとふわかこゝろかな
ら禁

たいしらす内

328 院後拾遺七五四
（廻しらず）

328 をとにのみきけはかひなしあふみなる いかこのいかてあひみてしかな

329 新千載一一三四
（廻しらず）
作・箇之集

329 人しれすものおもふときはなにはなる あしのしゝねのしゝねやはする
ら禁脚 ナシ禁

このうたつらゆきかしふにあり
は禁脚 ゆ禁 め脚

五九ウ・六〇オは
白紙。

330 こひわひていまはほかかたくあしのねの まつはしたにそもえはしめける
に禁脚

五九オ

331 なみたかはしのひくになかれつゝ つれなき人をこひやわたらん
む禁

332 禁本中の「○」はもとなく、
中務集

332 こひしともいはゝすそ四ろにおもほえて ひとにしられめ○ねなくころかな
ぬ禁四

333 こひわひぬおほたのまつのおほかたは いろにいてゝやあはんとむ四いはまし

あはさるこひのころを内

334 新千載一二三四
不達意の心をよ
ませ給うける

334 あふことをいつしかとのみまつかせと解のをとにしられてこひわたるかな

335 こひわひてうちふしのねも禁四にもえいつるはナレ禁四なけきをしたにつめはなりけり

他本

花のちりしを見て

336 古今一〇四二
つるへる花をみて
よめる三六帖六
一四九七

336 古はなみれはこゝろさへこそうつりけれ いろにはいてしとおもひしものを

子日しにまかりし人にをくれて

337 81と重出。

337 古素性

山たかみ雲ゐに見ゆるさくら花 こゝろのゆきておらぬ日そなき

はるのはてに

たいしらす内

338 後撰一四二(一)題
しらす

338 調

ゆくさきをおしみし春のけふよりは きにしかたにもなりにけるかな
せ内 あす内 めへき内

春のはつる日ひさしくこぬよしをある人のせうそこありしかは返

事のおくにかきつけし

339 調之

またもこむ時そとおもへとたのまれぬ わか身にしあれはおしき春かな
ん舞御 を禁

339 後撰一四六(一)や
よひのつごもりの
日、ひさしうまう
でこぬよしいひて
待ふみのおくにか
きつけ待ける、
左注「つらゆき、
かくておなじ年に
なん身まかりにけ
る」
調之作・調之

詞書ナシ―西遊歌

ひやう風にありし
ナシ禁御340 ときはなる松をはをきてあちきなく
お西
あたなるやとの桜をそみる
ま西遊歌 やみん歌341 さけりともみる人なくはさくら花
か西遊 を西遊 〇〇西
ちるをいとかくおしまましやは
も歌 なとか御
は禁御て禁
を禁
ナシ歌
もは西遊歌
し六一オ六一ウ・六二オは
白紙。342 桜花ちりなんのちはみもはてゝ
り西 む西
さめぬる夢の心ちこそすれ
す西遊歌
か歌
せめ西遊343 さくら花雪とふるめりみかさやま
めり西遊
いさたちよらん名にかくるやと
む西遊

343 歌合28二八

延喜御時御屏風に
つきなみの御ひやうふに内344 拾 神まつる卯月にさけるうのはなを
は内
しろくもきねのしらけたるかな
る禁
ま御
か禁御内

344 拾遺九一(延喜御時月次御屏風に六帖一八三(紫性作)・拾遺抄五九

345 山里にすむしるしなしほとゝきす まれにこんとはおもはさりしを

346 よみ人不知
われきゝてひとにはつけん解御
我きゝて人にはつけんほとゝきす おもひのほかになかはうからむ
ん解

346参考歌 後撰一
六四(本文「まつ
人は離ならなくに
ほとゝきす思ひの
外になかはうから
み人しらす」)

347夫木夏三

347 なてしこの花さきにけりわきもこか こひしき時のよきかたみ草

348 ちりぬともかけをやとめぬふちのはな いけのこゝろそあるかひもなき
まかふ西148強148
ん歌
もに西148強148
の西91強91歌
く歌

シハニウ

349新古今一九五
「題不知」大伴家
持作・家持集

349 郭公ひとこゑなきていぬる夜は いかてか人のいをやすくなく
新古今
は西強
き西
ぬる西強解御
ねん歌

350 いとならぬこゑよりあはせて郭公 もの思われとねをそなくらし

351 秋ふるさとは見しこともあらず郭公 なくねをきくはむかしなりける
そ解御

354 古今一九〇の
むなりのつばに人
のよおしむうたよ
みけるついでによ
める

355 六帖五十二二九
六三ウ・六四オは
白紙。

356 古今七七(廻
しらず)よみ人し
らず)

352 ふる里と人はいへともほとゝきす なくねをきけはめつらしきかな

353 けふくれてあすきなりはなてしこの 花おや夏のカタミとは見む
に禁即 を禁即 ん禁即

かんなりつほにてひとくあつまりてあきのよをしむうたよみけるつゐてよめる内

354 古かくはかりおしみつる夜をいたつらに ねてあかすらん人さへそうき
ト思ふ とおもふ禁即内

七月七日つらゆきかもとへつかはす
に即

なぬかのひのあしたみのゝかろにおくる西遊
なぬかあしたにひとにをくる歌

355 君にあはてひとひふつかになりぬれは けき七夕の心ちこそすれ
れ即 の西遊禁即歌 するかな歌
ひこほし西遊歌

356 よろ人不知 こぬ人をまつゆふくれの秋風は いかにつけはかわひしかるらん
に禁即 な禁 む即

野望歌等：西遊
のにのそめて歌

357 女郎花いかにおもふらんあきの野に 一夜それにし花の名たてに
はん歌 ね西遊禁即歌 む即

358 水のお祭をもゝみえすなかるゝ紅葉はゝ
いつれの秋かいろのかはらぬ

面：御

さん西遊

359 かりにくる野へのたよりに我やとを
とふ人あらはいさとこたへよ

なし西遊

360 秋萩のはなみれは人のみこひしくて
おらぬにそてそ露けかりける

なぬか西遊
たなはたのうたに内

361 ひさかたのあまのかはきりたつときは
織女つめのわたるなるらん

り西遊

む西遊御

361 新拾遺三三〇
七夕の歌に七

七月：歌
なぬかひとにおくる西遊歌

362 うちたえ祭すま西遊
はへてわかるゝ人はたなはたの
逢夜はかりはあけすやはあらぬ

絶：御
すむめる歌

なし西遊
かしもせよかし歌

363 あさゆけは露やお西
をくらんたなはたの
あまのはころもをししほるまで

け西遊

お西

む西御

お西御

364 西は「もとのい
ろはいつれ」歌の
次にあり

364 秋萩のなかにたちいてゝましりなは
われをも人は花とやはみん

まし西

む西遊

は歌

なし遊

ん歌

ぬ歌

さふ西
さう西

365 菊のはな見つゝもあやなしかもあらて 人の心に猶うつろふな

あやなく西歌
ひ祭
なを西歌
う〇うふなはた西
うつろふなはた西
うつろふなゆめ歌

なを祭御

あき西遊

366 新古今七十六
二だいしらす

366 新古今 ちとせふるをのへの松は秋ことに こゑこそかはれ色はかはらす

お遊御
尾十内

かせ西遊内

まされ西遊祭御 も祭御

の内

367 神な月ちゝにうつろふ菊花 いづれかもとの色にはあるらん

む祭

ちるもみち西遊

368 新古今千載六〇〇
二題しらす人丸
作

368 風にちる紅葉のいろはかみなつき からくれなるにしくれこそふれ

の西遊歌

す西遊

ふゆ西233西320遊233遊320

のふるは歌 つもれる西320遊320歌

に歌
は西233遊233

369 年くれてふるしらゆきのつもりつゝ 人のかよひも見えぬわかやと

をへて西233遊233
ふかく西320遊320

あとたえて西320遊320歌

かよひちも西233遊233歌

かよひちの西320遊320

六五ウ・六六オは
白紙。370 六帖一一二四五
(作者名ナシ)

370 くれて又あくとのみこそおもひしか ことしそけふにかきりなりける

たに御

としはけふこそ西遊

れ西遊

あき西遊

〇に歌

371 ちくさにも霜にもうつるきくの花 ひとついろにそ月はそめける

は西遊

れ御

はしめて西遊

379 あはぬ夜もあふよもいをしまたねゝは ゆめのたちゝはあれやしぬらん
また西遊 いを西遊 たち西遊祭即歌 む西遊祭

な西

380 玉葉九一四(題
 しらずじ)

380 けふくれてあすかの河のかはちとり 日にいくせをかなきわたるらん
いまいくとせか歌 ナシ西遊 む節

さふ西
 さう遊
 たいしらす内

381 鏡千載一一二
 (二題しらずじ)

381 人めをもいまはつゝまし春かすみ 野にも山にも名はたゝはたて

382 ひさかたの月人おとこひとりぬる やとにないりそ人の名たてに
を西祭 すむ歌 さしいれり西遊 さしいれ歌

ありす河にてとはせたまひしかは
ことは祭

383 夫木雜六

383 いさしらすみつねはこゝのありすかは 君かみゆきにけふこそは見れ
に祭即

六七ウ・六八オは
 白紙。

のこりのきく

384
40と重出。

384

きみかためころもしたてははつしもの
をきてのこせるきくにそありける

文永三年六月九日以光俊本書寫畢

一、西本願寺本による補遺

延喜三年十月十九日おほせによりてうたみつたてまつる女一の^{ナシ歌}み

や歌 御もきにたてまつらせたまふ御さうすくのものかたにをみつへてにて歌
この装きたまふときにうちよりさうそくたまふそのものにみつ^かくき

ナシ歌 かつたきにすれるうた
かたきにすれるうた

385
西1。

385 なかれいつるやまをしおもへはよしのかは ふかきころもたえむものかは^{の歌}
^{ん歌}

386
西2。

386 わたつうみのかみそしるらむおなしくは あまのかるもを我にかさなむ^{ん歌}
^{ナシ歌} また歌

387
西3。

387 しらくものたちのみわたるくらはしの やまにころをおもひつめつゝ

朱雀院をみなへしあはせのうたをみなへしあはせのうたをみな

へしといふいつもしをくのかしらにを過すへ歌おきてよめる

388 西 8。

をゝぬきてみるよしもかなゝからへて へぬやとあきのしらつゆのたまやと過すへ歌

389 西 9。

をりつれはみてあきのひはなくさめつ へてこの花をナシ歌しらせすもかなみなてなく過すへ歌

390 西 19。

うらわきて風やふくらむおきつなみ おなしとこ甲ころをに甲歌たちかへりつゝ

たひのかり歌

391 西 21。

としことにもひきつらねくるかりを いくたひきぬととふひとそなしき甲過歌

392 西 29。 統古今一
七・五(固不知)
・六帖六一・一九四

392 みつのおもにのみ察即乙におひてわたれるうきくさは 名みのうへにやたねをまくらむの丙
うへ丙 ふもさつきを察即丙乙 きけん察即丙乙

396
西 35。

396 なつならぬくさととりすてゝうへしたにかへし歌 ひえのやますもおいにけるかなひ道歌

かみやかは

397
西 36。

397 すみのえのきしのまにくむかしより かみやかはらぬまつやうへけむつや道

みなせかはは道歌

398
西 37。

398 をちこちにわたりかねてそかへりつるかた歌 みなせかはりてふちになれゝはめ歌

さひかはわ歌

遣

87 楠

399
西 38。歌本ノママ

399 むかしよりありのまにくナシ歌 あらせぬは わかすさひかはひとのこゝろを

しらにすゝむし
ナシ歌

400
西39。

400 やま^ふちかみひとにもみえぬすゝむしは あきわひしらにいまそなくなる

ひくらし
といふたいを辨四乙

401
西40。拾遺三七
二六ひくらし
之作。拾遺抄四八

401 まつ^{こと歌}のねはあきのしらへ^{としは辨四乙}に^にきこゆなり たかくせめあけてかせそひくらし
に道辨四歌乙

しをんに
ナシ歌

402
西41。

402 よひ^るのまとおもひつるまにあきのよは あけしをにしにつきのみゆらむ
にわかおもひつる歌
ん道歌

ちゝこくさ

403
西
42。

403 はなのいろはちゝこくさにてみゆれとも めれと歌
ひとつもえたにあるへきはなし

かりやすくさ

404
西
43。

404 うくひすのこゝろ は歌にはあらてはるをたに はこくて歌
かりやすくさ す歌○とひかへりゆく とひ歌

わかれのうた

405
西
44。

405 かたかけのふねにやのれるしらなみの せ歌 も歌
たつはわひしくおもほゆるかな

遺

さうのうた

89 楠

406
西
46。

406 きみゝてはありぬへしやとこゝろ むん に歌 ん 歌
たゝまく お歌 もうき歌をしきからにしきかな

407
西 48。

407 いつこなるやまにかあるらむかりかねは
く題 ナン歌 ん題歌 の歌 を題歌 にの題 ゆなる歌
 おとのほのかにきこえつる哉
ら歌 きゝたかく歌

408
西 49。

408 かみなつきもみちのときはやまとにて
 からくれなるにみゆるさほやま

詞書ナシ
一歌

さうのうた

409
西 54。

409 あらたまのとしのよとせをなましるに
ひ歌
 身をすてかたみわひつゝもへぬ
そすむ歌

410
西 56。

410 なけきのみおほえのやまはちかけれと
いはそ題
 いまひとさかをこえそかねつる

411
西 57。

411 ことさらにしなむことこそかたからめ
ん題歌
 いきてかひなくものをおもふ身の
き歌 ナン題歌 は歌

412
西 61。

412 ひさかたのつきをさやけみも〇ちはの
ナン題 み題歌
 こさもうすさもわきつへらなり

七日

413
西 63。

413 あき風たちて歌はいつしかとのみみまちしかと あひてぬるよはたゝひとよのみ歌なり

414
西 64。

414 よとさしてぬるきみなれはあまのかは ゆふまくれにもいさわたりなむん

九月一歌

九日

415
西 65。

415 おいはみのからきものなりけふはしも ぬれに歌てもぬれんむんきくんのしらつゆ

遺

詞書ナシ一歌

あき

91 補

416
西 66。

416 うちはへてやすきいもねすきりくす あきのよなくゝきわたるらむん

つゝそふる歌

やまこえ

417
西 67。

417 ともにわれかへるやまちのもみちはの
 おの^{を誦歌}かちり／＼わかるへらなり

詞寄ナシ一歌

あき

418
西 68。六帖一
六五三（作者名ナ
シ）

418 あき^{も歌}ゝりのはれぬあしたのあき^{おほそらを誦歌}ゝりの
 みるかこともみえぬきみかな

419
西 69。

419 あき^{あき誦歌}のゝにひくらしつるをゝみなへし
 よるやとまらむは^{ん誦歌}なのなたてに

420
西 70。

420 をきのはのそよとつけ^{す誦歌}〇はあきかせを
 今日^{く歌}からふくとたれ^{しり歌}かいはまし

421
西 72。

421 もとのいろはいつれなるらんしらつゆの
 したにうつろ^{れるうふ誦}ふわかやとのきく

422 西 74。

422 ふちの花はなちりなむんのちもかけしあらは
いけのこゝろうつつふところのあるかひはあらん

423 西 75。

423 ことさらにみにこそきつれさくらはな
みちゆきふりとおもふはさらなんむやそん

424 西 76。

424 たまほこのみちゆきふりにやまさくら
をおるとやはなわれをのわれをはなのおもふはんらん

詞書ナシ一歌

なつ

425 西 79。

425 つきみつゝをるすへもなきわかやとに
いとゝもきなくほとゝきすかな

四月にやまのゆきてをみる歌

426 西 80。

426 しらゆきもまたきえすはてめけりやまさとをは
いつはかりかにははるなをしるらむん

詞書ナシ一歌

なつ

427
西81。

427 つきみつゝまつとしらすやほとゝきす

こてはたほかにゆきてなくらめ
こてはたほかにゆきてなくらめ
 こてはたほかにゆきてなくらめ
 こてはたほかにゆきてなくらめ

詞書ナシ一歌

さうのうた

428
西82。

428 としをへておもひくゝてあひぬれは 月日のみこそうれしかりけれ

429
西83。

429 よとゝもにひとをわすれぬむくゑこそ
ひにや歌 けふはうれしくあひもそむらめ
み歌

430
西84。

430 みつゝわれなくさめかねつさらしなの
か歌 をはすてやまにてりしつきかも
ら歌

詞書ナシ一歌

あき

431
西 85。

431 あまの川ふねさしわたすさをしかの しからみふするあきはきのはな

432
西 86。432 くらへみむわ^{ん歌}かころもてとあきは^{いなも}きの はなのいろ^{に歌}とはいづれまされり433
西 87。433 あらたまのとしふりつもるやまさ^{はな歌}とに ゆきあかれぬ^{る歌}はわかみなりけり434
西 90。434 をしめ^{お通歌}ともとゝまらなく^{やまさくら歌}にさくらはな ゆきとのみこそふりてやみぬれ435
西 92。

435 わかやとのいけのふちなみさきしより やまほとゝきすまたぬひそなき

詞書ナシ一歌

なつ

436
西 93。436 ほとゝきすなくさみたれのみしかよは つきかけさへ^ひそともしかりける

437西94。玉葉一三
九七。歌の歌の中
に。六帖五十三
〇五。作者名ナシ
・夫木夏二

詞書ナシ歌

こひのうたのなかに内

437 さみたれのたそかれときはつきかけの の歌内 おほろけにやはわかひとをまつ

ふゆ

438西95。

438 みよしのゝやまのこゝろは今日やしる いつかはゆきのふらぬひはありし

439西96。

439 むめ〇かえになくうくひすのこあきけは め よしのゝやまにふれるしらゆき

詞書ナシ歌

あき

たいしらす内

440西97。玉葉五五
五。題不知し

440 わかやとのあきはきのはなさくときそ お歌 をのへのしか も〇こあたて かく内なく

をのへ内

441西100。

441 たちかへりまたもみにこむもみちは きて見むにこむ を歌 おとしなはてそやま川のたき

442 七五〇。六帖一
シ）（作者名ナ

442 やま たかみ歌 ちかくめつらしけなくふるゆきの しろく いたく やならんとしつ む もりなは

443 西104。

443 やまのはゝ を またとほけれとつき を かけを お しむ ろ そまつ さ きにたつ

444 西106。玉葉二
五〇

444 みる も ほと か に に い つ を せ よとか月かけの また よ ひの ま に た かく なり ゆく

詞書ナシ一歌

なつ のうたのなかに内

445 西108。玉葉三七
〇）夏 の 歌 の中 に

445 さ み た れ の つ き の ほ の か に み ゆ る よ は ほ と と き す た に さ や か に を な け

446 西109。

446 い ら ぬ ま に こ む と い ひ し か は こ よ ひ こ そ わ れ て を し け れ な つ の よ の つ き

447 西110。

447 あ た ら し く て る 月 かけに ほ と と き す ふ る こ あ し る く な き わ た る な り

詞書ナシ一歌

ふゆ

448 西 111。

花とのみゆきのみゆれはふゆなから
こゝろのうちやはるにやあるらん

449 西 112。六帖一
七三四（作者名ナ
シ）

としふかくふりつむゆきをみ〇ときそ
こしのしらねにすむこゝちする

450 西 113。

ふるゆきとかつしりなからにほはねと
なかはすきてはゝなとこそみれ

451 西 114。

えたのうへにゆきをおきなからくらふとも
たれかはむめにあらすとはいはむ

452 西 115。

ゆきのうへにおもふこゝろはいちしろく
つれなきひとのめにもみえなむ

詞書ナシ一歌

春

453 西116。

453 よそにたゝのみにかへらん歌てやゝみなむやまさくら はなのこゝろもののよのましらぬにも歌

454 西117。六帖六一
八四六

454 うくいすのたにひ西361通117通361甲禁乙のそこにてなくこゑをは禁御やまひこたにやつたへきかせぬ
みねにこたふるやまひこもなし甲通361西禁御内乙

455 西118。拾遺三四
（題しらす）・拾
遺抄三五。

455 あをやきのはなたのいとをよりあはせて たえすもなくかうくいすのこゑ
おなしおほんときちゆうしやうのかういけいてんのにようことうたあはせしはへりしに禁御乙

延喜六年六月廿一日壬生忠峯日次贊使としてかとのかはのにへと

のにありみつね宣旨かひナシ題のつかひ
かひのつ

かひとしてたゝみねかかへらむとするこのうたをおくるを題

あきの御ときたふのたゝみねかおほやけの御つかひにてものへまかるにおほるかはのもとにまかりあひてものなといひかくるにたゝみねかいそきてまかりければよきはへる歌

456 西120。忠岑集。

456 とゝむれとゝと題歌めかねつもおほる川 ゐせきをこえてゆくみつのこと

457
西121。

うへの御ことあそはすをほのかにきゝて
しのひて歌 ひかせたまふ歌
ひかせあそはす歌 ナシ歌

457 あきかせのふきもてこすはしらくもの あまつしらへをいかてきかまし
しら歌

458
西122。

七日あしたに

七月八日の夜ひとにあひてわかとて歌

458 たなはたのあかてわかれしけさよりも よるさへあかぬわれはまされり
ぬ歌 の歌 ナシ歌 さ歌
かへり歌

詞書ナシ歌

八日のうた

459
西123。

459 ゆきめくりいまこむあきをこひそへて こよひはかりはあひやしなまし

いかひをけの銘
即ち題 ナシ歌
にむかふ歌

460
西124。

460 ゆめにたにねはこそみえめうつみひの おきゐてのみそあかしはてつる

ひはしの銘

461
西125。

461 ふゆすきはなけおかれなむものゆへに きみかてにはたゝなるへらなり

朱雀院のつるのはかななるを

462
西126。

462 あしたつのよさへはかなくなりけり 今日そちとせのかきりなりける

さをかけ

463
西128。

463 いつれとおおもほゆなくにおほつかな いさほかけにてひとめみしかは

くれのおも^{を歌}

464
西129。

464 いつしかとまつゆふくれのおもかけに みえつゝみえぬことのわひしさ^{も歌}

詞母ナシ一歌

たかふる

465
西135。

465 おりたちてうへすはありともことさらに^{をやまたの歌} あきのかりにはあはむとそおもふ^{らん歌}

ひとのいへのほとりのやまのゐ

466
西136。六帖五十一
三三四（作者名ナシ）

466 すきかてにひととはとまれとやまのゐの たよりとおもへはあさくさりける^{そあな歌}

十月たきのみつ^{もみちたきにおつ歌}

471西146。統古今八
二九三紀百之英歳
のすけにてまかれ
りける時、別をし
みてよめるじ

470西145。

469西142。

詞書ナシ一歌

468西141。

467西138。

467 も○ちはのおちくるたきはかけてのみ たゝぬにしきをほすかとそみる
み道歌

こひ西318
道318

468 こあきけはおいのまさるにひとにくゝ きつゝのみなくよふことりかな
こひ西318
道318
老：道141
り西318
道141
道318

なつ

469 さみたれのよわくらくともほとゝきす さやかにたにもなきてこぬかな
は道歌

470 あしたつとけふしもふれるいろなれは なくこあさへにさむきなるへし
は歌
りけり歌

い
な
は
の
か
み
歌
み
の
ゝ
す
け
の
く
た
る
に
お
く
る
を
道
ナシ
歌

471 ひとひたにみねはこひしきゝみかいなは としのよとせをいかてすくさむ
ぬ歌
ん道歌

○472
内七十四
延喜十五年
勢・六帖
集 十六人撰・伊

472

ほとゝきすよふかきこゑは月まつと おきていもねぬひとそきゝける

を歌
ほ内

延喜十五年たけり御ひやうふうた内

ナシ歌

延喜十五年三月廿三日 左衛門督のいへにてみかはのかみのむまの

門内
さまのかみ歌

はなむけによめる

ふ歌
せしに歌

473

なにしおはゝとほからねともみやきやま これにたむけのぬさにせよきみ

473西150。歌本の詞
書は「名にしおへ
は」の歌の次に
あり。

へは歌

を歌

にち
を歌

ち歌

えん歌

くすりおくるうた

を歌

とて歌

474

わかるゝかくるしきこともやまなくに なにかくすりのあるかひもなし

ナシ歌

ナシ歌

474西151。歌本の詞
書は「なにしおへ
は」の次にあり。

詞書ナシ歌

あき

475 西153。六帖四一
四五八（作者名ナ
シ）

475

あきかせのふきぬとみればいてゝこし いへちのかたそこひしかりける
おもへは道 おもへは歌 れ歌
さけは歌

476 西156。

476

雪中のすきのおなしおほせ
延喜のおほんときひやうふのうた祭即乙 ナシ即乙
延喜十七年廿一日おほせによりてたてまつる即ひやうふのうたゆきのうちのすきのき歌
 ゆきのうちにみゆるときはゝみわやまの やとのしるしのすきにそありける
き祭即乙 のやま祭即歌乙 る祭即乙 や道 るらん道
ま歌 さ祭即乙 り即

歌本の詞書は485の
左注を参照。

すゝかやま

477 西157。

477

おとにきくいせのすゝかのやまかはの はやくよりわかこひわたるきみ
を道 おとにきくいせのすゝかのやまかはの はやくよりわかこひわたるきみ
音：歌
かなイ本 きみ道 かな歌

まとかた

478 西158。夫木雜七

478

あつさゆみいるまとかたにみつしほの ひるはありかたみよるをこそまで
ナシ歌 りか道 ひ歌

あしろのはま

479 西159。夫木雜七

479 しほみてはいりえのみつもふかやめの^{ま歌} あしろのはまに^{せよ歌}よれるおきつなみ

うはせかは

480 西160。

480 うはせ川したのこゝろもしらなくに ふかくもひとの^{おもほゆるかな歌}たのまるゝかな

はりかは^{の歌}

481 西161。夫木雜六

481 からころもぬふはりかは^{の歌}のあをやきの いとよりかくるはる^{は歌}やみに^{ん歌}こむ

わたらひ

482
西
163。

482 たまくしけふたみのうらにすむあまの わたらひくさはみるめなりけり
〇道

は歌
みつ

483
西
164。

483 ことさらにわれはみつらんむ道こさらから歌はら さしてとふこ歌へき人はなくとも

うきしま

484
西
165。

484 いさやまたこのうきしまにとまりなむん道 しつみつゝのみよをふれはうしう道歌

なかはま

485
西
166。

485 なかはまにゐていく道しほたるゝほとゝきす さつきはかりはあまにさりける

左注―歌本は詞書
となつて46の前に
あり。

おなしとし歌

此十首は延喜十六年四月廿二日わたくしことにつきていせのさい

か題

くうの御れうに歌
くうにまかりたるときすなはち寮頭国中をつかひにてくくの所^な

あるところくをかゝせたまへる御ひやうふのうためしありしかはすゝかやまたてまつりし歌
くなを題てよませたまふ

詞書―題本は「近
江介」に「兼輔也」
の注あり。

同十六年九月廿二日近江介の消息云法皇明日石山御幸あるへしい

とまあらは今日ゆくへし云々仍まかりたれは屏風障子等ありこれ

に所々のおもふきを可題とあれはよのうちによみたるをやかた汝

かけとあるをなふれとなをとあれ○^{〇は題}かきはへりぬ法皇經一宿て御

488
西 170。487
西 169。486
西 168。

舟にてせたにのほらせたまふはしのもとにふねつなきて今日もの
すけ進 介

ともたてまつる今日すけ進 介かたらひていはくく〇りやふねにのりておほん

ふねにくしてさふらふへしとすなはちこのうたを
ナシ進

おなしとし九月廿日あふみのかみのをこせたるふみにいへるやうあそむあしたにはうわういしやまにまうてさせたまへ
しけふのうちにきたれひやうふさうしにところ／＼にたかひたるをよのうちにかくへしそのたいもみつからかくへきな
りとありにはかなることなれとおとろきてまかれるみかとひとよはとまらせたまひてみのひ即ふねにてかへらせたまふ
とまらせたまへるところに即さうけのことゝもありすなはちうたをたてまつる歌

486
いつみにてしつみはてぬとおもひしを 今日そあふみにうかふへらなる

その屏風障子等歌所々のたいにしたまふ
即進 歌 の歌 のおもむきにしたかへり歌

487
あしひきのやまへのみちはいかなれや ゆくとみれともすきかてにする

488
我われよりわかれもさきにおひにしまつなれは ちとせのうちにあはさらめやは
さき歌 ひとり歌

489 西171。

489 むめの花さきてかひなきおきつなみ たちよりてたにみる人もなし

たいしらす内

490 西172。校後撰一
ず〇六（題しら

490 あまのゝるたなゝしふねのあともなく おもひしひとをうらみつるかな
こく内
をふね歌内
にあり歌

491 西173。

491 もしほやくあまのたくひのけふりこそ おもふかたにはたちのほりけれ
はぬかたに歌
るし歌

492 西174。

492 やまさにとしはふれともたきつせの はやくわかみはひとたにもこす
はし
し歌

こひのうたのなかに内

493 西175。玉葉一二
七二（恋歌の中

493 したにのみもえわたれともうちはへて わかおもひをはけつひともし
としを内
かた道

494 西176。

494 も〇ちゝるあきならすともさをかしは やまのねたかくいまもなかなむ
み道歌
ね歌
しか道歌
のほ道
ん道歌

495 西177。

495 むらさきのいろしこければふちの花 まつのみとりもうつろひにけり

496 西178。

496 かへるかりくもちのたひにくるときは ふ歌 なにをかくさのまくらには と歌 せん歌 する

詞書ナシー内

舞のうたこれも歌
障子 に したかふ のおもむきによる歌

初西179。新古今一
二五九(題不知)

497 さらしなのやまよりほかに も歌 てるときも つ歌内は題 なくきめかねつこのころの月 そら歌内

ゆきのうちにおもひをのふるうこの少将 といふたい左近の中符に歌 におくる を題 かはりて歌

498 西180。

498 ほかにもやゆきはふるらむ ん歌 いま さら題 へてに はるこぬやとは に題歌 なたかみ ん歌 む

詞書一強本、「右大臣」に「貞信公」の注あり。

延喜十八年八月十三日 〇八月題 右大臣家八講 左に歌 おこなふに する歌 于時 ナレ歌 仏法僧といふ

とり のなきければよみてたてまつるなかつた歌 なく有感このうたをたてまつる

499
西
181。

499 あしひきの やまにすむらん歌 みやまにすらも このとりは ふ たに ふ やはなく へし歌 いかなれ

は しけきはやし も歌 の おほかるを たかき はやし歌 こすあも あまたあれとは

ねうちはふき とひくる すき歌 て すて はるなつ ふき ふゆの ふき ときもあるを きみかあ

きしも ーみちはの からくれなゐ に歌 の ふり いて、歌 ○○て を歌 なくね き ○さ き た き に と歌

きかせそめつる

500
西
182。

500 やまに み歌 すらまれにきこゆるとりなれと さとにも せ き あ歌 みかときよりも そなく歌 きく 本ま、

501
西
183。

501 そのひともきみはつけしもせしものを い かけて ん歌 かりのかねてしりけむ

とのゝ御かへし さあものそうみなものなかつを御つかひにて歌

502 西 184。

502

のりをおもふこゝろしふかくなりぬれは い歌 と歌 さとにもとりの に歌 みゆるなるらん しそありけん歌
みゆるなるらん

同年 しはすの歌 つこもりの夜な陣をみて おにを歌

503 西 185。

503

おいぬ きに遊
に歌 すらもみやのうちとて ナレ歌 みのかさをぬきてやこよひゝとにみゆらん む遊

おなしとしの九月廿八日 殿遊 天上のひと ナレ遊 ちきりていはて の遊
ち遊 やまのほ

とりにゆきてあそは む遊 なんとちきるひと な遊 うこの少将 少将

そのひになりておのゝさはりありてきたらす二

504
西186。

すのうたをつかひにつけておくる

おなしとし九月廿四日てんしやうひとみちみにいきけるにさこんのせうしやう二人にかはりて歌

504

いつしかとまつしるしなきもみちはの

おのかちりくちりやしなまし

505
西187、六帖二
三八九（作者名ナ
シ）

505

みやひとのかすはしりにきをみなへし

いつらとゝはゝいかゝこたへむ

詞書「源本「源少
将」に「左少将旗」
の注記あり。

やまのほとりたつぬるみちにそうのいへありもみちゝりみちての

こりの花まかきにありはなすゝき風にしたかひてなひく人をまね

くにゝたり源少将むまよりおりて

506
西188。

506

ひとしれぬやとになうへそ花すゝき まねけはとまる我にやはあらぬ

そうにかはりて かへし歌

507 西 189。

507

いまよりはうへこそまさめはなすゝき あ歌 と歌 とまりけり歌 ほにいつるときそ人よりきける

詞書「題本」頭少
將に「同邪」の注
記あり。

ゆふくれに東光寺座主阿闍梨にあへりきのもとにむしろをのへい

けのほとりにもしひをつらねてまつひとかめの茶すゝむへきに

あまたの盃さけありむまときひとむらのきくをいへのまへにうへ

たり感歎無極各和歌うたありよふけてかへら〇とする頭少將のゝ む題

りむまを座主阿闍梨におくりてつきにのりてかへる を題

きくのはなきたるところによるとまりてひとくみる歌

508
西 190。

508

きくの花あきのゝなかにうつろはゝ 夜ふかきいろをこよひみましや
ら歌

おなしとし十月九日更衣たちきくの宴したまふそのひさけのたい
九十一
の
の

うた銘：遊

のすはまの銘のうたをんなみつのほとりにありてきくの花をみる
はな
はな

おなしとしの十月にきくのはなのえんみやすところたちのしたまふにをみなへしのもとにきくのありつづのほとりにか
けうつりたり歌

509
西 191。

509

きくの花をしむこゝろはみなそこの かけさへいろはふかくそありける
お
らん
の
も
る
歌
歌
歌

おなしとし十月十九日ふなをかに行幸ありしときに御乳母の命婦
の
ナシ

まへにめしてもみちをりてたてまつれとありひとえたをりてこの
お
ひ
お

うたをむすひつけてたてまつる

おなしつきの十九日めのとのみやうふもみちみにてたりけるをかへるとてもみちひとえたおりてたてまつるこのうた
をそへたり歌

513
西 197。

513

わかるともきみをしらねはけさまては あ歌 ちるはなをのみをしみけるかな お題歌

遣

512
西 194。

512

このはるそえたさしそふるゆくすゑの む歌 ちとせをこめておふるひめまつ は歌

おなじこの歌

ナシ歌

とを歌

藤太守の

せんじきこんのせうしやうにかはりて歌

ナン歌

小將曹司

511
西 193。

511

かたるをもきかまほしきにあきのゝの も題歌 はな○に み題歌 人し いに題歌 人のこぬかな

ひとのむすめのもきに ナシ題 よめる るこきに歌

510
西 192。

510

けふのひのさして いら歌 らせ いててらす歌 はふなをかの もみちはいとゝあかくそありける

野望ひとをおもひやりてうちにて
のにいてたりけるひとのいりにをそくかへれば歌

かつらとさくらのきとよりふちのはなのはひかゝれるうた
ナシ歌 ナシ歌 なをたれあひたり歌

514
西 198。

514 かつらよりかをうつしつゝさくらはな
を歌
 うきうしろにもふちそさきける

詞書ナシ歌

春

515
西 200。

515 はるくれはさひしきやとはつれ／＼と
て歌
 にわしろたへにはなそさきける
木に 庭は 庭に ちり歌

516
西 203。

516 いろことナシ歌にみつきのなよるといひて
本のま
 おほつかなくもてらすつきかな
あ歌 ぬ歌 いろ歌

517
西 204。

517 ひとものきくにはあれとつゆしもそ
も歌 霜に歌
 わきてこと／＼いろはそむらし
け歌

518
西 205。

518 いまゝてにあふさかやまのもみちはの
 ちらぬはせきやなへてそめたる
さ歌 とと歌 け歌

519
西 206。

519 きくのはなをりて夜ふけぬしらつゆは お誦歌
わかてなからに も歌 おきやしぬらん つ歌

520
西 207。

520 しろたへのいもかそてしてあきのゝに も歌
ほにいてゝまねくはなすゝきかな

521
西 208。

521 あきのゝのはなみにくれはしらつゆに に歌
しとゝにも も歌 わかぬれにけるかな

522
西 209。

522 さやかにもてるつきかなきくのはな
ひるみることそよるもみえける

春

523
西 210。

523 いかにして今日をとゝめむをしとおもふ お誦歌
はなのみちより りて歌 ひはくれにけり

524
西 211。

524 はるかすみたちてゝのへにこしかとも い歌
おいて ひ歌 わかなはつみこゝちなし り歌

525
西
212。

525 さくらはなのとかに おらん歌もみむふくかせを さきにたてゝもはるはゆかな ん歌む

526
西
213。

526 はるくれはふくかせにさへさくら花 は選に ら歌わもはたれにゆきはふりつゝ

527
西
214。新千載
九（題しらす）

527 む め選歌内〇かえにゆきのふれゝはいつれをか はなとはわきて 折り歌をりてかさゝむ ん歌

はるのうたのなかに内

528
西
215。玉葉三四
春御歌の中に

528 ゆきとみてはなとやしらぬうくひすの まつほとすきてなかすもあるかな

みや歌

うちにてほとゝきすをきゝて

529
西
216。

529 ひさかたのそらちかけれはほとゝきす くもゐのこゑのと を選歌ほからぬかな

はる

530 西 217。

530 お座
をしとのみおもふこゝろにひとにくゝ ちりのみまさるはなにもあるかな

531 西 218。

531 うくひすのなきいにくくきゝ歌しかはむめのはな さけるとみしはゆきにそありけるり座歌

532 西 219。

532 としことになにけと歌のしるらむなきものを くれゆくはるをなによふことりしも座歌

詞書ナシ一歌内

さふ

533 西 220。 統古今一
〇〇八（題しら
ず）

533 にこりえほ内におふるすかたまもの歌こもみかくれて わかこふらくを歌はしるひとそなき

534 西 221。

534 おほ井川せきてしからみみ座歌かけてのみ おもふこゝろは歌をとゝめかねつも

535 西 222。

535 ともかくもけふこそきかめのちはいかに歌ゝ あすともしらぬ身をはたのまむん歌

おもひをのふ
やすむ歌

536 西 223。 夫木雄七

536 身をわふるなみたはいまそいつみなる
み道歌
たかしのうらそみちしほなる
はうま道 につる歌 本のみ、

詞母ナシ一歌

はる

325 537 西 224。 歌上の句は 135 b

537 むめの花たゝにやはみむはるさめにぬれくそなをうりやしてまし
る歌 お道 ほか

538 西 225。

538 めにみえてころにしむはむめの花 ふきふきてくるかにそありける
ん道 す道歌 ゆく歌 せ歌 さ歌

539 西 226。

539 あをやきのいとめもみえすはる事に花のにしきをたれかおるらむ
を歌 ん歌

540 西 227。

540 はるかすみたちなからよはあかしてはかりとゝもにそなきてかへりし
を歌

詞書ナシ一歌

春

遺

545 西232。統千載三
〇四二題不知じ。

545

なつくさはしけくひことになりゆけと
ひことにふかく内
か題
は歌かれにしひとのみえぬわかやと
は歌
とは内
〇〇題
やとかな内

544 西231。

544

おいぬれはかしらもしろくうのはなを
は歌お題
折：歌
ゝりてかさゝむみもまとふかに
か歌

詞書ナシ一歌

なつ

543 西230。

543

はるたちてひはへぬれともうくひすの

なくはつこゑをいまそきゝつる
はけふ歌542 西229。統千載九
〇題しらす内

542

はるのたつけふうくひすのはつこゑを

なきてたれにとまつきかすらん
か歌
覽：内
む題

たいしらす内

541 西228。

541

むめのはないろはめなれてふくかせに
ん題

にほひくるかそとこめつらなる

546
西 234。

546

としことにとゝめかねてそわかやとに
ちるはなの歌
ちるはなの歌

さきにもたゝぬくいをするかな
ひ遊歌

547
西 235。

547

くるとしの歌
 ひくらしにゆきもふらすはさくら花
と遊歌

ひとにもみえてよにもをらし
お遊
ナン歌

548
西 237。
二八(東のかたに
まかりける人につ
かはしける)

548

あしからのやまちはみねとわかれなて
ゆく歌
は内

こゝろのみこそゆきてかよはめ
ナシ歌
へ内

たいしらす内

549
西 239。
三十七(古今一
しらす)

549

すかのねのなかきひなれとさくらはな
いろ内

ちるはのとはみしかゝりけり
こ遊歌内
る内

550
西 240。

550

春のひはくれ〇しぬらむはなをおきて
や遊歌
ん遊歌
を遊
き歌

かへらむことそのものうかりける
ることそ歌
れ歌

むまのけつるふち歌

551
西 241。

551

むらさきのいろのふかきはみなそこに
 みえつるふちのはなにさりける

554
西 244。

554

おそき^{を歌}　　む^む歌○まはあしふちなく^{ら歌}てあふれとも

こゝろのみこそさきにたちけれ

かけふち

553
西 243。

553

こひすればやせこそす^{のを歌}らめものこしのゆふかみしかく^{て歌}おもほゆるかな

あしふち

552
西 242。拾遺四二
〇いかるがに
げし。拾遺抄四九

552

ことそともき^{き選舞即乙}くたにわか^すてわ^{り選舞即歌内乙}かなくも

ひとのいかるかにけやしなまし

ゆふかみ

いかるか^{と舞乙}にけ

555
西
245。

555 我をたにあひやはまたぬさもつらきはなかけふちるあすもひはあり

あを

556
西
246。

556 このめはるときになるまていはしろの
な歌 あをたにもまたつくらさりけり
い歌

かすけ

557
西
247。

557 たなはたにわかゝすけふのからころも
も歌 たまとのみこそぬれてかへさめ
ひち歌
ら歌

延喜四年かみなりのつほにて

つきをみて歌

558
西
248。

558 あくまてにこよひのつきをみつゝあらて
くまても
はくもに
るまて歌 ねてあかすらむ人のこゝろよ
ても歌
ん歌

さふ

559 西 249

559 かりかねを西 300 道 300 西 300 道 249 道 300 歌
かへるかりくもひはるかにきくときは たひのそらなるひとをこそおもへ
し西 300 道 300 歌
ふ西 300 道 300 歌

一本きく

たなはた内

560 西 250。新勅撰一
三五二(たなはた)

560 としかあひにわれをきませるきみをおきて またなはたしこひはしぬとも
に内 ま道内 に道内
て内 を道

ひともときく内

561 西 251。新勅撰一
三五二(ひとときく)

561 あたなりとひととにするものしもそ はなのあたりはふきかてにする
れ道 き道
きく内 からに内
す道内 つ道

素性におくれて

ほふしふまかりてのちによめる内

道

562 西 252。続後撰一
二五二(素性法師
身まかりて後によ
める)。六帖四一
五〇二

562 きみなくてはるのやまへにはるかすみ いたつらにこそたちわたるらめ
ぬし内 ふ内 の内

延喜七年五月晦夜うちのおほせことによりてたてまつるうた二す

563
西 253。

563 さみたれはこよひはかりかほとゝきす こえもやけふのかきりなるらむ
〇た 通 ひ 通 ん 通

564
西 254。

564 おなしくはやまほとゝきすみやひとの まつときにやはなきてわたらぬ

これにはすゑはかゝれぬをこと本のすゑあるをかける
〇+ 通

春

565
西 255。

565 よとのやまゆきはふりつゝはるかすみ たつはかすかのゝへにさりける
し 通

566
西 256。

566 ちるといへはひとりとおもふさくらはな めならふいろのまたしなけれは
る 通

567
西
257
。

567
 しろたへにさけるかきねのうの花の
 いろまかふまでくらす月かな

たいしらす肉

○568
○西259。
○題。新勅撰三
しらず

568
あきふかきもみちのいろのくれなるに^内

肉

ふりて おいしい
て 内

おいしい
鶏肉

○のみ
○を速
ナシ内
の○

の○なくしかのこゑ かな内
ナシ内

569
西
260
。

としことにあきくるかりのたよりにも わかおもふ人のことつてもなし

570
西
261
。

570 月をあかみおつるもみちのいろもみゆ ちりおとのみはきこえさりけり

உ
தொது

571
西
262
。

571 かみよりとしをわたりてあるうちに
ふりつむゆきのきえぬしらやま

572 西 264。六帖二
五四(作者名ナシ、
五句「まさらさり
けり」)

572 ちはやふるかみかきやまのさかきはゝ しくれにいろもかはらさりけり

あるひとに ナシ内 なきひとを ナシ題 こひてよするうた ナシ内 なくなりにけるめをこひ

てうたを ナシ内 おくれり を題内 そのかへしに
けるひとのかへしことに内

573 西 265。玉葉二三
六一(亡き人を恋
ひて歌附れりける
人の返事に)

573 なきをこそきみはこふらめとしふれは あるもかなしきもの そ内 にさりける そ題

はる

574 西 267。

574 ことさらに み題 きみはこしかとさくらはな あかてそいまはかへるへらなる

575 西 268。

575 ふちのはなかけてそしのふむらさきの ふかく はるを題 したつになりぬとおもへは

なつ

576 西 269。

576

ほとゝきすけふとやしらぬあやめくさ

めめね
道にあらはれてなきもこぬかな

577 西 270。

577

むはたまのよやふけぬらむん
道はらへとの

かはさわききに
本、
道にちとりしはなく

同十六年秋述懷

578 西 273。六帖四十一
八・賀之集

578

くさもきもしたうへはかれゆくあきかせに さきのみまさるものおもひの花

道

かへしつらゆき

131 補

579 西 274。六帖四十一
賀之集

579

ことしけきころよりさくものおもひに

たまたま
道のえたをやつらつえ
道につく

おなしとしの八月十三^{日…}やのよ左衛門のかむのとのにてさけ^{ナシ}などの^道

○^{ある}○^{ある}ついでにて

580
西 275。

580 あきのよのあはれはこゝにつきぬれは ほかのこよひはつきなかる^んらむ^道

あたらしくをみなへしをうへて

581
西 276。

581 ふるさとののへやこひしきをみなへし へはしはかりそたひはくるしき

しをに

582
西 277。

582 秋^{あき}のよのなもあるものをした^{はみなくは}うつを あけしほつきの○^に○^{しに}○^にゆくらむ

らに

583
西
278。

583 あき風にかをのみそふるはなゝれは にほふからにそひとにつまるゝ

584
西
279。

584 きりくもりみちもみえすもまとふかな いつれかさをのやまちなるらむ

585
西
280。

585 のへをたにまたみぬひとのためまたきおきて つとにをりつるあきはきの花

藤原遠中朝臣しなのへまかるひとに

586
西
282。

586 にしへゆくつきをゝしめはあつまちに わかるゝひとをまたいかにせむ

あきのひぬしなきいへをすくるに二す

587
西
283。

587 なにせむにきくをうへけん^むおゆる^ふる^ゆまで あらむときみかおもひけるかな

さふ

588
西
285。

588 ゆめにたにさやかにみえぬ人ゆへに おほつかなかるこひもするかな

589
西
286。

589 わかこひはしらぬみちにもあらなくに まとひ^ふわたれ^ひとあふ人もなし

590
西
287。

590 ひとりぬるひと^のに^きか^いく^にに^そか^みな^つき に^わか^はに^もふ^るは^つしく^れかな

亭子院にかつらのきをほりてたてまつる^とに^き

591
西
288。

591 みかくれてふけるのうらにありしいしは おいのなみにそあらはれにける

592 西 299。 院後撰一
 一三六(一) 院に侍り
 ける桂の木を亭子
 院に廻りて奉ると
 てよめる(一)

593 西 290。

594 西 291。

595 西 292。 院後撰一
 三五五(一) 延喜の御
 時女一百の装束待
 りけるに接束てう
 じて追はすとて装
 束に替かるべき歌召
 されけるに詠みて
 奉りける(一)
 596 西 293。

597 西 295。

家にはへりけるかつらのきをしていしぬんにほりてたてまつるとよめる内

592 ことのはをつきのかつらにふえたなくは なにゝつけてかそらにつてまし
の

をみなへし

593 ぬしもなきやとにきぬれはをみなへし はなをそいまはあるしとはおもふ

594 おほそらのかけのみゆるをやまの井の そこのふかきとおもひけるかな

延喜のおほんときをんいちのみやのときはへりけるにさうそくうしてつかはすともにかゝるへきうためされけるによみて
 たてまつりける内

595 さはた川かはせさのしらいとくりかへし きみうちはへてよろつよはへよ
かはさ内 やへん内

596 はまちとりあとふみつくるさゝれいしの いわはとならむときをまてきみ
は内

597 このもとにこよひはねなむんさくらはな またよこめてもちりもこそすれ
内

598
西 2%

くさまくらたひゆくひとはたれならむ
しりしらすともやはかしてむ

ゐなかのいへのさくら を題

599
西 297

さくら花みやこならねとはるくれは
いろはひなひぬものにそありける

600
西 298

かりにきてたよりにをらは たまはこの題 さくらはな
みちゆきふりとはなやおもはむ

601
西 299

ちとりなくはまのまさこをふみわけて
ゆくたひゝとをあは れとおもふ題 れたれとおもふ

602
西 301

いか さり題 するあまのこゝろもしらなくに
こひにをやらむこひわすれかひ

603
西 302

き むめかえ題 みかよ え にきすむありすのうくひすは
なき ま題 なには お題 なをゝらせつるかな

604
西
305。

604 わかやとにはなのたよりにとふひとは ちたれは ちりなんむのちにまことゝおもはむ

605
西
306。

605 はるなれとはなみこゝろもなきものを うたてもなくかうくひすのこゑ

606
西
309。

606 はるかすふみたちにしものをいまもなを よしのゝやまにゆきのみそふる

607
西
310。

607 さみたれのよもたらぬよにつけとてや ひるからつきのまたきみゆらん

遣
608
西
311。

608 あまのかはつまむかへふねナシさはさはすはさをの さしてはあれとゝしにひとたひ

七日

屏風のうたひとのいへうみのほとりにあるところ

609
西
314。

609 のへにこそわかなはつねにつむときけ おきのみるめはとき／＼そよる

ゆくふね

610 西
315。
新古今
十 屏風歌
八 延喜
十 夫木
八 雑時

610 なみのうへにほのにみえつゝゆくふねは うらふく風そしるへなりける

やな

611
西
316。

611 はるのためうてるやなにもあらなくに なみのはなにもおちつもるらむ

をんなのナシ座あるいへにおつる花をみる

612
西
317。

612 はなさかりこむとかいひしひとよりも さきにさくらはちりぬへらなり

あき

613
西
319。

613 こゑにのみちるときこゆるもみちはの よるのにしきはかひなかりけり

詞書ナシ一歌

ちもくのあしたにおもひをのふ

614
西
321。

614

みやこにてはるをたにやはすくしてぬ はたゝに歌いつちにかりのなきてゆくらむ きて歌

法皇六条の御息所かすかにまうつるときに大和守忠房朝臣あひか

たらひてこのくにのなところを倭歌八首よむへきよしかたらふ

によりて二首 を遺 おくる于時延喜廿一年三月七日

延喜廿一年きやうくのみやすんところかすかのやしるにまうてはへりけるひやまとのくにのつかさにかはりて内

八〇〇延喜廿一年
 京極御所春日の
 社に詣て待りける
 日大和國のつか
 るに代りて歎め
 る。歌合28三四
 616西323。歌合28二
 二(初句、十卷本
 「きみしなほ」廿
 卷本「君かなほ」)

617西324。拾遺一〇
 四六(京極の御所
 春日にまうで待
 りける時、國司の
 牽りける歌あまた
 ありける中に藤
 原忠房作)。歌合
 28五二。

618西325。歌合28三

619西326。統後撰一
 〇三二(同廿一年
 京極御所春日の
 社に詣て待りける
 日大和國の司に
 代りてよめる)。
 歌合28一九(初句
 二句は十卷本廿卷
 本共に「わかなつ
 むとしはへねと」
 ・袖中抄)

620西327。歌合28一
 〇(十卷本「ちは
 やふるかすかの
 はらにこきまては
 ともみゆるかみの
 ときねかな」廿卷本
 「ちはやふるかす
 かのゝへにこきま
 せて花かとみゆる
 かみのきねかな」)

615

ふるさとのかすかのゝへのくさもきも

ふたゝひはるにあふこともかな

し誦
としらなん内

616

きくになをかくしかよはゝいそのかみ

ふるきみやこもふりしとそおもふ

617

はるかすみかすかのゝへにたちわたり

みちてもみゆるみやこ人かな

618

かすかのも今日のみゆきをまつはらの

ちとせのはるはきみかまにく

619

としことにわかなつみつるかすかのゝ

もりはけふやはゝるをしるらむ

620

ちはやふりませてはなともみゆるみやこ人かな

かな本々、誦

晩秋遊覧同賦秋景引閑行各分一字
 得秋

621
西 329。

621 欲尽光陰感未休 楚山多処昔周遊 誰言物色傷心意 紅葉飄飄李日秋

622
西 330。

622 ちりぬへきもみちをしりてかさしつゝ あきをとめつとたのみけるかな

岑

近江介

623
西 331。

623 錦葉錢共訴次逢苜蓿列：題 秋遊任意歩疎慵 行々賞得群山色 未弁仁林茅幾峯茅：題 峯：題

624
西 332。

624 あしひきのやまをおそくを題そあゆみけるくけ題 あきのもみちをよきすくしつれば

遊

寒

右近先少将

141 楠

625
西 333。

625 杖酔閑行廻眼看 欲閑景色晚来寒○*題 林頭山面皆蕭索 唯有黄昏紅葉残

626
西
334。

あきはつとおもひそしらぬもみちのは
みちにかふまてみゆるなりけり

枝

頭少将

627
西
335。

共尋秋景幾相隨
醉析山^{折…遊}辺紅葉枝
自覺光陰笛不駐
每年遂惜尚奔馳

628
西
336。

たまはこのみちはしつかにみつなから
あきをいそくとみるそわひしき

谿

左衛門
佐^{尉…遊}

629
西
337。

暮秋遊覽日將西
紅葉紛々路透引
歩徘徊何所翫
長松無主在深谿

630
西
338。

も^{も…遊}みちはのかせのまに／＼ちるときは
みる人さへそしつこゝろなき

遺

634
西 342。

634

あきのいろはゆきてみるまにくれぬれは つひに^るあかてそかへるへらなる

連歌^甲

633
西 341。

633

一惜^除蕭辰漸欲除 昇山臨水意何疎 従尋幽境憐秋色 尽日行々不静居

疎

民部丞

632
西 340。公忠集。

632

いさこゝに今日あすへなむ^んあきのそら いまいくかゝはのへにのこれる

631
西 339。

631

閑歩秋光欲暮中 林間寂寞野辺空 醉来催感還応痛 一道風駟万里紅

紅

掃部助

635
a 西
343 a。635
a もみちはゝこそもやまへにみてしかは〇て とも 題
近江介635
b 西
343 b。635
b ことしもあかぬものにさりけるわ 題
源少将636
a 西
344 a。636
a も〇ちのみをしくはあらすきくの花み 題 お 題
左衛門尉636
b 西
344 b。636
b しくれのさきにをりてかゝむお 題 かゝむ 題
躬恒

637 a 西 345 a。 西本
願寺本公忠集 九
上月のひとくも
上のみとて、ひみ
がしやまのかたに
ありきて、二句
「かたもしられず」
637 b 西 345 b。 西本
願寺本公忠集 二と
ありければ千古

637
a さしてゆくかたもさためすあきのゝに
掃部助637
b もみちをみつゝとまるひなれは
式部丞638
a 西
346 a。638
a こそのけふあかすなりにしわれなれはあけふ 題

638
b 西 346
b.

638
b みねのもみちのめつらしきかな

修理亮
是則：遺

639
a 西 347
a.

639
a いろふかきも○ちたつぬとうちむれて

左衛門尉：遺

639
b 西 347
b.

639
b しらぬやまちにゆきまとふかな

式部丞：遺
左衛門尉

式部丞
ナシ遺

640
西 350。古今二
七はるのとくす
ぐるをよめるに。
六帖一一三四三

640
あつきゆみはるたつひよりとしつきの

ナシ
はる祭即乙
しはす歌

ち甲祭即歌内乙

いにしかこともおもほゆるかな
る、祭
く甲祭即歌内乙
く遺 ナシ歌

641
西 352。

641
わかなつむかすかのゝへはなになれや
ん乙
り内

よしのゝやまにまたゆきのふる
くま内
は内
そ内
ナシ甲

うちの甲
御屏風 のわかやりみつにむめのはうか甲

642 西363。玉葉二四
七延喜御時御屏
風に

642 みつのおもにうきてなかるゝむめの花 いつれをあふとひとのみるらん
うへ甲
は甲禁御内乙 は甲禁御内乙 む禁
わ選 ナシ甲

643 西410。六帖六一
六五一。

643 さくらはなやまにちりはのちはいかに 今日こそゆきてをらまほしけれ
よのま甲 なん選御乙 なむ申禁 ナシ甲 や禁御乙
ちりなんのちや内 いかにせん内 お選御内
われはおりてめ甲

二、禁裏本による補遺

646 禁一。八帖一
一〇八。

644 五月〇のたまにぬくひをあやめくさ ねにあらはれてなきぬへらなり
雨一御内 き内

645 禁85。

645 さよふけてなくものにもか郭公 よふかくなきていつちなるらん
かは御 む御

646 禁一。新勅撰八
四一。

646 勅わひぬれはいまはとものをおもへとも こゝろにぬはなみたなりけり
し内

詞書一内本「朱雀院」に「寛平」との注記あり。

647 禁149。古今二二三
三(朱雀院のをみなへしあはせに)
みてたてまつりける
る。六帖六一一
三二(作者名ナシ)
・歌合11一
648 禁150。古今二二三
四(朱雀院のをみなへしあはせに)
みてたてまつりける
る。六帖六一一
三二(作者名ナシ)
・歌合9一五
(廿尊本能宣作)
・歌合11二(定文作)
・實万
649 禁152。古今二七七
七(しらぎくの花をよめる)
六二〇一・和漢朗詠二七三・新撰
・深窓秘抄・金玉三十六人撰
650 禁153。六帖六一八二八・歌合20一
これより頭注に記す忠岑甲は書後部
蔵五〇・一二、忠岑丙は同五〇一・一二
651 禁218。拾遺五三三
三(みつねたゞみねにとひ侍ける参議伊賀・忠岑甲一四七・又二句うへよりをけと)
・忠岑丙一二三
(又たみねとよ)
・拾遺抄四〇八

朱雀院ナシ歌のうた歌
をみなへしあはせに
よみてたてまつりける内

647 古 つまこふるしかそなくなるをみなへし
を御歌内
おのかすむ野ゝはなとしらすや
にはあら歌

648 古 をみなへしふきすきてくる
むとしの御歌
むさしの御歌
あきかせ内
むさしのは
めこそみえねかこそしるけれ
はみえねと内

649 こゝろあてにおらはやおらん初霜の
む御内乙
をきまとはせるしらぎくの花
お内

650 ふるさにかすみとひわけくるかりは
ゆく歌
たひのそらにやはるをすくらむ
は甲
さ乙

忠岑 これひら とひこたふ
みつねたゞみねにとひはへりけるさんきこれひら内

651 しらつゆはうへよりをいかなれは
ゆく御
はきのしたはのまつもみつらん
む御

これひらのあそむのとひこたふうた歌
こたふ内

652 拾遺五十一 四「こたふみつ ね」三句「あきは 九三」六六六 一〇九・忠岑甲一 四九三句「あきは 結句」なり 考内一二四「みつ ねこたふ」・拾遺 抄四〇九 653 拾遺五一 五「たゞみね」下 句「つゆのわくと はおもはさるなむ」 忠岑甲九一（詞 巻ナシ）二句三句 「まつさくえより いろつくを」結句 「わくるとなみそ」 忠岑甲一四八 （返し）二句三 句「ますさはよ りいろつくを」五 句「わくるとなみ そ」忠岑丙一二 五「たゞみね」三 句四句五句「いろ つくを」つゆのわく とはおもはさるな 集・拾遺抄四一〇 654 拾遺 21 655 拾遺 22 内本の「じ たはの〇」の 〇は原本のまゝ。 拾遺五一六「又と ふこれひら」二 句以降「まつのし たはのいろつくは たかしかみにか けてかへすそ」 忠岑丙一二六「み つね」二句三句 「まつのしははも ちるは」結句 「かけてかへすそ」

652 さをしかのしからみふするはきなれは あきはきは歌内 したはやうへになりかへるらむ は丙 ん歌内乙

たゞみねこたふ ナシ内

653 あきはきはまつさすえよりうつろふを は乙 つゆのこゝろのわけるとぞ見る なみそ乙

わくとはおもはさる南内

これひらたゞみねかこたへを ナシ内

654 もとはよりうつろこゝろをいふからに いへかへすへきことのなきかな

みつねかこたへを ナシ内

またとみ内

655 千年ふるまつのみとりのうつろふと したはのうつろふは内 たかしからみにかけてふするそ かへす内

も内

は乙

かへす内

彦氏の説に從い拾
遺五一九を補う。
658 祭ナシ。菊地瑞
内本は詞書ナシ。

拾遺五
657 祭24。拾遺五
八〇またとふこれ
ひら^ニ忠岑丙一
二八^ニこれひらと
ふ^ニ初句「しろた
へに」

拾遺五
656 祭22。拾遺五
七〇^ニたふつね、
七〇三句四句「ち
とせのあきにあひ
くれはしのひにお
つる」忠岑丙一
二七^ニたふみね^ニ

みつね^{ナレ内}こたふ

656 まつといへとち^{よ内}のあきに^{ナレ内}しあひぬ^{く内}れは しのひに^{お内}うつるしたはなりけり

これひらこたふ

またとふ内

657 しろたへのしろき月をもくれなるの いろをもなとかあかしといふらん^{む内}

こたふ

みつね

658 昔よりいひしきにける事なれば 我らはいか^{に内}今^{に内}はさためん

たふみねこたふ

659 禁 225。忠岑丙一
歌は「くれなゐを
てるひのいろにく
らふれはつきのこ
ろもいかゝはな
れんじ

659

くれなるに^そてる日のいろにたとふれば 月のひかりもいかゝこたへん^む
乙

660 禁 225。拾遺五二
○「又とふこれひ
ら」歌は内本に同
じ、忠岑丙一「三〇
句」ひかりなきを
も「下句」いとを
もよるといふそあ
やしきじ

660

かけ^みくれてひかりなき^をよもころもぬふ いとを^むもなとかよるといふらん^乙

みつねこたふ

661 禁 227。拾遺五二
一「こたふとつね
四句」いとをひよ
れはじ

661

むはたまのよるはこひしき人にあひて いとを^よもくれはあふとやは見ぬ^ん
丙

たゝみねこたふ

662 禁 228。忠岑丙一
三「たゝみね」
歌は「くれたては
まひともきぬか
たいとのあふをは
よるといふはかり
なりじ

662

くれは^たてはまた日も見^えぬ^乙かたいの あふをはよるとおもふはかりそ

666 蔡ナシ。御地辨
彦氏の脱に従い忠
岩内二三を初う。

665 蔡21。拾遺五二
三(こたふみつ
ね。歌は内本に同
じ)

664 蔡230。拾遺五二
二(又とよ伊衡、
歌は内本に同じ)
・忠岩内一三二
二(これひら、二
句「かすはみそ
に」下句「なそ
かつきといひは
しめけん」
詞母ナシ一内

663 蔡
229。

これひらこたふ

663

かたいとのひとすちにのみこたふれは ふたみちかけてとふかひもなし

みつねこたふ

またとふ内

664

よるひるのかすはよそかにあまらぬを なとなか月と人のいふらむ
み内乙ち内 いひはしめけん内 ん乙

たゝみねこたふ

665

あきふかみものおもふ人のあかしかね よをななか月といふにやあるらん
こひする内 む内

たゝみね

666

あきふかみこひするしかのあかしかね　よをなか月といふにさりける

みつね

667

そらにたつはるのかすみとわか戀と　つきせぬものはいつれまされり

たゝみね

668

たゝぬ日もたつ日も^{ナシ}かす^にみあるものを　いかなるよにかこひはたゆへき

みつね

669

君こひにきえかへる身と草の葉に　をくしら露といつれまされり

を^一祭⁶⁶⁷心²³²に思^忠事^甲一
た^一よる^心とふたり^丙か
九^六み^つね^たゝ
み^ねか^ゝた^みに^お
も^ひける^{こと}を^と
ね^じひ^こた^へける^みつ

一^一祭⁶⁶⁸心²³³に思^忠事^甲一
二^二返^しゝ^忠
丙^九七^七ゝ^たゝ^忠
ね^じ

一^一祭⁶⁶⁹心²³⁴に思^忠事^甲一
句^一三^三み^つね^二
句^一と^し・忠^忠丙^九八^八み
句^一み^つね^二初^初句^句
「き^きみ^みこ^こひ^ひて」

670 葉235。忠岑甲一
三句「いのちに句
一四句「返し」二句
一。へてあるものをか
みね」
忠岑丙九「を」
みね」

671 葉236。忠岑甲一
一五「みつね」歌
は「よのなかを」歌
もひいたらぬくま
なきといつれまされ
せといつれまされ
り」
〇「みつね」歌は
「よのなかにおも
ひいたらぬくまな
きとそらふくまな
きといつれまされり」

672 葉237。忠岑甲一
以降「はてしなく
かかせはたらぬく
まはおほかり」
忠岑丙一〇「た
てみね」三句「は
てもなし」結句
「くまはおほかり
」

たゝみね

670

こひはたゝいのちにかけてあるものを
いかなるよにかつゆはたゆへき

みつね

671

世の中におもひはたえぬく^{ま御乙}さなしと
そらなるかけといつれまされり

たゝみね

672

おもひやるこゝろの^{くま乙}ほとは^{いま御}くさ^{ま乙}もなし
風のいたらぬく^{ま御乙}さはおほかり

みつね

一六七 禁²³⁸。忠岑甲一
句「つみつね」初
三句四句「すくひ
とをそらゆくも
と」忠岑丙一〇
二「みつね」初句
「ひとしれす」四
句「そらよくか
せ
と」

673

ひ^{いひ乙}とはれ^{し乙}すうきたるこひをする人と
そらゆく月といつれまされり

たゝみね

一六四 禁²³⁹。忠岑甲一
岑丙一〇三「た
みね」二句「そ
ら
にむららる」

674

風ふけはそらにむれたるくもよりも
うきてこひする人はまされり

みつね

一六五 禁²⁴⁰。忠岑甲一
九「みつね」二
句三句「おつる
みだのつきせぬに
・忠岑一〇四「み
つね」三句「つ
き
せぬと」

675

こひわひていつるなみたのつきせ^{ねと面乙}ねは
はるのなかめといつれまされり

たゝみね

一六六 禁²⁴¹。忠岑甲一
二〇「つね」二
句「つね」忠岑
五「たゝみね」二
句「つね」忠岑
もじ

676

身をしれはおつるなみたはあ^{も乙}はれなり
春のなかめはつねのふること

678 禁243。忠峯甲一
二二(返し)、二句
三句「たゝぬおり
もありはれもせぬ」
・忠峯丙一〇七
「たゝみね、二句
三句「たゝぬをり
もありはれもせぬ」
結句「いかゝさた
めん」

忠三六二
峯三三
丙一
一〇八
つねにみ

あきゝりはたゝぬ日もありはれもしぬ
ふり^{にし}なん名をはいかゝとゝめん^む

たゝみね

680 禁 245。忠岑甲一
二四返し、結句
「つれはまされし」
・忠岑丙一〇九
句「たゝみね」、四
句「ゆくあかつき
のし」

680

まつほとはたのみもふかし夜をこめて おきてわかるゝことはまされり

みつね

668 禁 246。忠岑甲一
二五「みつね」、初
句二句は御本に同
じ、四句「ふかき
おもひと」・忠岑
丙一〇「みつ
ね」、初句「わたつ
うみの」、四句「ふ
かきおもひと」

681

わたつ^うみのち^ひいろのそことかきりなく ふかきおもひにいつれまされり

たゝみね

682 禁 247。説古今一
八四九「つね」
・忠岑甲一
・忠岑丙一
三句「かすしらぬ」
・忠岑丙一「た
ゝみね」、二句「ち
いろのそこは」

682

ふかけれとちひろのそこはかすし^{うす}りぬ 人のおもひはさほもさゝれす

みつね

683 禁 248。忠岑甲一
三五「みつね」、三
句「みるよりは」
・忠岑丙一「二
句「みつね」、二句三
句「ひとのこゝろ
をみるよりは」

683

つれもなき人のつらさを見るよりも^{は乙} 身をなけつるといつれまされり

684 禁249。忠岑甲一
三六「返し」初句
二句「うし」とても
あやなにかは
・忠岑丙一「三
（みつね）」歌は御
本に同じ）

684

うしといひてあやなな御乙ことしも身をなけん いきてある身のことはまされり

みつね

685 禁250。忠岑甲一
三七「みつね」三
句四句「いるつき
とすきゆくあき
と」・忠岑丙一「
四（みつね）」四句
「すきゆくあきと」

685

はる／＼と山のはさしてゆくいる乙月と すきゆく月といつれまされり

たゝみね

686 禁251。忠岑甲一
三八「返し」二句
「ことはあはれも」
四句五句「いりぬ
るつきをたのむは
かりそ」・忠岑丙
一一五「たゝみ
ね」二句「ことは
あはれも」結句
「よのまはかりを」

686

あきはつることはしはしもまさりなん いりぬる月はよのまはかりそ

みつね

687 三九〇^三。忠岑甲一
句「たのま^んはと
六^一」・忠岑丙一
一三九に同じ

687

あた人をたのま^んほとゝかりの子を かさねて見んといつれまされり

たゝみね

688 四〇〇^三。忠岑甲一
岑丙は「たゝみね
と」といふ詞書のみで
歌を欠く。

688

とりのこはかさねてしはしありぬとも 人をたのま^んむ事のはかなさ

みつね

689 四一〇^三。忠岑甲一
句「お^もはんと」
・忠岑丙一
一七
（詞書も歌も甲一
四一と同じ）

689

つらきをもうきをもいはてたのま^んと いろにいてんといつれまされり

たゝみね

690 三二五^三。忠岑丙一
一八

690

うきことをいひてしるしのなきよりは こゝろにこめてあるはまされり

692 歌12。統後拾遺
 六三七(平貞文の
 家の歌合に)・歌
 合16三八(作者名
 ナシ)
 693 歌75。新古今
 一〇六(たいしら
 ず)・歌合20一八
 (十卷本作者名ナ
 シ・廿卷本興皇作)
 694 歌82。統千載
 二一七(亭子院の歌
 合に在元方作)
 ・歌合20四一(十
 卷本源雅固作、廿
 卷本作者名ナシ)
 ・万代集(正方作)
 695 歌83。歌合20
 四

八691 歌6。歌合16
 一

三、歌仙家集本による補遺

はしめの冬

691 神無月紅葉の色は吹風と 滝の水とそおとしはてつる

たひらのさたふんの家のうたあはせに内

るか内
みて内

692 久かたの雲井はかりにあひしより 空に心はなりにし物を

たいしらす内

693 新古今
いもやすくねられさりけり春の夜は 花のちるのみ夢に見えつゝ

694 深山出てまつ初声は郭公 夜ふかくまたむ我宿になけ

695 むらさきにあふみつなれやかきつはた 庭の色さへかはらさるらん

696 歌84。玉葉三〇
八延喜五年内より
仰せことにより
て奉りける屏風の
歌に。・歌合20四
七

697 歌85。新拾遺九
三八延喜十三年
亭子院の歌合に恋
をよめる。・六帖
四一。一一。・作者
名ナシ。・歌合20
六〇。・廿基本作者
名ナシ。

698 歌86。続古今九
四五延喜十三年
亭子院の歌合に。
・六帖四一。一六五
・作者名ナシ。・歌
合20六二。・万代集

699 歌87。歌合20六
四。

700 歌88。拾遺七二
五。題しらす。よ
み人しらす。・六
帖四一。七一。・作
者名ナシ。・歌合
20六六。・拾遺抄
二六六。・読人不
知。

701 歌282。

延喜五年うちよりおはせことによりてたてまつりけるひやうふのうたに内

696 わかきゝて人にはつけん時雨 鳥…内 おもふもしるくまつこゝになけ

恋

延喜十三年ていしるんのうたあはせにこひをよめる内

697 涙河いかなる水かななるらん ふかゝ内 など我恋をけつ人のなき

延喜十三年ていしるんうたあはせに内

698 たれにより思ひみたるゝ心とも そと内 しらぬそ人のつらきなりける さ内

699 人のうへと思ひし物をわかこひは なしてや君かつれなかるらん

700 うつゝにも夢にも人によるしあへは くれ行はかりうれしきはなし

701 霧のうちのみやまかくれの紅葉ゝは 日のひかりにそ色はみえける

○702 歌³²⁶。玉葉二一
六〇題しらす

702 浪たゝはおきの玉もゝよりくへく おもふかたより風^{は内}もふかなん

四、内閣文庫本による補遺

やよひのつこもり

五703 内187。後撰一四
五〇やよひのつこ
もり

703 暮て又あすとたになき春の日を 花のかけにてけふはくらさん

すかたあやしと人のわらひければ

七04 内194。後撰一〇
八五〇すがたあや
れしと人のわらひけ
れば

704 伊勢の海のつりのうけなるさまなれと ふかき心はそこにしつめり

題しらす

705内204。拾遺八七
(題しらず)

705夏部
手をふれておしむかひなき藤花　そこにうつれは波そおりける

亭子院歌合に

706内211。拾遺二八
八(忠岑作)・歌合
に(忠岑作)・六帖一五
20六(忠岑作)・拾
遺抄一八四(読人
不知)・和漢朗詠
四四・是則集・忠
岑集・童蒙抄

706賀部
三千年になるてふ桃のことしより　花開春にあひにける哉

707
かのおかに萩かるおのこなはをなみ　ねるやぬりそのくたけてそ思ふ

708内238。新古今四
九九(だいしら
ず)

708
初雁の羽風すゝしくなるなへに　誰か旅ねの衣かへさぬ

709内256。続古今六
九四(題不知)

709神部
をしなへてあめの下にもちはやふる　神ちの山の神はもるらし

題不知

710内259。統古今九
八六(題)しらず
・六帖二一四一
(作者名ナシ)

710 遠山田もるや人めのしけゝれは ほにこそ出^ぬめ忘やはする

是貞親王家歌合に

711内288。新千載三
一六(是)貞親王の
家の歌合に・歌
合4一〇(作者名
ナシ)

711 宵く^ゝに秋の草葉に置露は 玉にぬかんととれは消つゝ

燈懸水澄明

712内293。新拾遺一
七二(燈懸水澄
明)

712 みなそこの影もうかへはかゝり火の あまたに見ゆる春の夜半哉

題しらす

713内295。新拾遺五
〇三(題)しらず
・夫木秋三

713 秋風に山とひこえてくる雁のはむけにきゆる嶺の白雲

題しらす

714内299。新拾遺一
ず二〇五（題しら
ず）・六帖五―六
四八（作者名ナシ）

714

あさな／＼けつれはいとゝみたれつゝ 我黒髪のとけぬ比哉

明治書院『古今集
総索引』（西下・滝
沢編）による。

五、古今集による補遺

715 古今
1137。

715

てるつきをゆみはりとしもいふことは 山の端さしていれはなりけり

六、後撰集による補遺

いづみのくにゝまかりけるにうみのつらにて

716

はる深き色にもある哉住の江の そこも緑に見ゆるはま松

恒・716 後撰
片仮名本
（中院本
六帖五―一
二）
（作者名ナシ）

七、古今和歌六帖による補遺

717 六帖 一 二七
(明恒) 六帖 六
八四九 (素性) 古
今 一〇〇 (題し
す) よみ人しらす

717 まつ人もこぬものからに驚^{ゆへ}の なきつる枝^花をおりてけるかな

718 六帖 一 一六五
・古今 一八三
うかの日よある
みよのたぐみね作
・忠岑集

718 けふよりはいまこんとしのきのふをそ いつしかとのみ待わたるへき

719 六帖 一 一七四
(或本みつね)

719 こゝに又わかあかぬ月を山のはの をちのさとはをそしとやまつ

720 六帖 一 二〇四
(或本みつね)

720 紅葉はの流てとまる^{よとむ}みなとをそ くれゆく秋のとまりとは見よ

遺

721 六帖 一 一六〇
(みつね或本)

721 ちとりなくさほの川霧たちかへり つれなき人をこひわたる哉

165 補

722 六帖 二 一八〇

722 しからきのみねたちかくす春霞 はれすもものをおもふころかな

723 六帖三—三三

723 しらなみのうてともたゝすむれるつゝ 人にとほかもめれたるとり

724 六帖三—四四八

724 ありそうみのうらめしくこそおもほゆれ かたかひをのみ人のひろへは

725 六帖四—二五三
 ・一人の心をいか
 ・頼まむ」という
 句。下句に付けた上の

725 ますかゝみぬしなきかけはうトマルつるとも

726 六帖五—九九九
 拾遺七九三(題し
 らず)たみわ作
 ・忠岑集

726 月かけをわか身にかふるものならば つれなき人もあはれとやみん

727 六帖五—四四五
貫之集

727 まことなきものとおもひせはいつはりに なみたはかねておとさゝらまし

728 六帖六—三〇八
 ・古今九一七(あ
 ひしれりける人
 すみよしにまう
 けるによみてつ
 はしける)忠岑
 ・新撰・忠岑集

728 すみよしとあまはいふともなかるすな 人わすれくさきしにあふナてリふ

729 六帖六—八一六
 ・古今二二(寛
 平御時きさいの
 原菅根作)・歌合
 5 一〇(菅根作)
 ・菅万

729 秋かせにこゑをほにあけてくるふねは あまの戸わたるかりにさりける

・730 六帖六一八四七
・古今一〇六四題
しらす」よみ人し
らず)

731 六帖六一八九二
注あり、後撰一七
二、夏之夜、しば
し物がたりしてか
へりにける人のも
とに、又のあした
につかはしける、
伊勢作、伊勢集

風間書房『作者分
類夫木和歌抄』に
よる。

732 夫木秋一と雑十
三に重出。六帖一
一三二と二四
四七に重出(共に
作者名ナシ)

733 夫木秋一

734 夫木雑一・新拾
遺五三九(八丸作)
・六帖一一四八三
(作者名ナシ)

735 夫木雑一・六帖
一一四七三(作者
名ナシ)

730 吹かせをなきてうらみよ鶯は われやは花に手たにふれたる

731 ふたこゑときくとはなしにほとゝきす よふかくめをもさましつるかな

八、夫木和歌抄による補遺

732 東路のいさねの里ははつ秋の なかきよひとり^あな^あかすわれなそ

733 雲はるゝあまのさよはしたえまかも とわたりくらし七夕つめは

734 くれなるのハしほの雨そふりぬらし 立田の山の色つく見れは

735 おもはしと思ふものから夏雨の ふり捨てたき君にもある哉

736 夫木雜六

736 をとに聞いつきの宮のありす河 たたふなおかのわたりなりけり

737 夫木雜十三

737 秋風朝にまかせてせとをわたる哉 すまのうらはのあまのはし舟

十卷本を底本としてその右に廿卷本を校合した。『平安朝歌合大成』による。

九、亭子院歌合（歌合20）による補遺

738 歌合20一七（十卷本では興風作）
・夫木春四（忠岑集）

738 ふりはへてはなみにくれはくらふやま いとゝかすみのたちかくすらむ

739 歌合20三九・六帖一六七（作者名ナシ）
・麗花集（貫之作）
・雲集（貫之作）

739 はなみつゝをしむかひなくけふくれて ほかのはるとやあすはなりなむ

740 歌合20四二（廿卷本では源のませ方）

740 けふよりはなつのころもになりぬれと きるひとさへはかはらさりけり

741 歌合20六一（十卷本では興風）
・六帖四一六（作者名ナシ）
・興風集

741 みをもかへおもふものからこひといいは もゆるなかにもいるころかな

742 歌合20六三(廿
卷本では作者名ナ
シ)

742 はつかしのもりのはつかにみしものを なつ廿
なとしたくさのしけき おもひそ廿こひなる

『平安朝歌合大成
一』による。

一〇、某年躬恒判問答歌合(歌合29)による補遺

むかしのうたよみのはるあきをあはせける

左

くろぬし

743 歌合29一。

743 おもしろくめてたきことをくらふるに はるとあきとはいづれまされり

遺

右

こたふ

とよぬし

169 補

744 歌合29二。

744 はるはたゝ花こそはさけのへことに ゝしきをはれるあきはまされり

745
歌合 29 三。

左

くろぬし

745 あきはたゝのへのいろこそにしきなれ かさへにはへるはるはまされり

右

とよぬし

746
歌合 29 四。

左

くろぬし

746 さをしかのこゑふりいてゝくれなゐに のへのなりゆくあきはまされり

747
歌合 29 五。

右

とよぬし

747 かすみたちのへをにしきにはりこめて 花のほころふはるはまされり

748 歌合 29 六。

748 しつはたにあまのはころもおりかけて ひこほしをまつあきはまされり

左

くろぬし

749 歌合 29 七。

749 あをやきにいとよりかけてあきことに たまをつらぬくはるはまされり

右

とよぬし

750 歌合 29 八。

750 むしのねのくさむらことによもすから なきあかしたるあきはまされり

遺

左

くろぬし

171 補

751 歌合 29 九。

751 ふみちらすはなもいろ／＼にほひつゝ うくひすのなく春はまされり

752
歌合 29 一〇。

右

とよぬし

752

きりくすなくゝさむらのしらつゆに
つきかけみゆるあきはまされり

みつね判す

753
歌合 29 一一。

753

おもしろきことはゝるあきわきかたし
たゝをりふしのこゝろなるへし

左

くろぬし

754
歌合 29 一二。

754

こひするにわひしきことをくらふるに
なつとふゆとはいづれまされり

右

とよぬし

755 歌合 29 一三。

755 なきなかすなみたもそてにそほちつゝ
ほせとかわかぬふゆはまされり

左

くろぬし

756 歌合 29 一四。

756 いとゝしくあつかはしきにこひにさへ
みのみこかるゝなつはまされり

右

とよぬし

757 歌合 29 一五。

757 きえかへりものおもふやとにいとゝしく
ゆきのふりつむふゆはまされり

遺

左

くろぬし

173 補

758 歌合 29 一六。

758 こひわひてうちなくそらにせみのこゑ
しらへあはするなつはまされり

759 歌合 29 一七。

759

さむきよにうすきころもをかへしつゝ
ぬれとねられぬふゆはまされり

右

とよぬし

左

くろぬし

760 歌合 29 一八。

760

なかきひをおもひくらしめてむしのねを
よるはなきあかすなつはまされり

右

とよぬし

761 歌合 29 一九。

761

くさもきもおもひもともにかれゆきて
しくれにぬるゝふゆはまされり

左

くろぬし

762 歌合 29 二〇。

くさもきもおもひもしけくなりゆきて
つゆにそほつるなつはまされり

右

とよぬし

763 歌合 29 二一。

ひとはこすこほりにやとはとちられて
おきひにもゆるふゆはまされり

みつね判す

764 歌合 29 二二。

いつもくいかてかこひのやすからむ
ふかきころそわひしさはます

左

くろぬし

765 歌合 29 二三。

よのなかにわひしきことをくらふるに
おもふとこひといつれまされり

766 歌合 29 二四。

766

をりふしにいひしことのみわすられて
あひみぬほとこのひはまされり

右

とよぬし

767 歌合 29 二五。

767

こゝろにもまかせぬなかにひとしれす
おもひかよはすことはまされり

左

くろぬし

768 歌合 29 二六。

768

つくく／＼とちきりしほともすきゆくに
まてともみえぬこひはまされり

右

とよぬし

左

くろぬし

769 歌合 29 二七。

769 つれもなきひとにおもひをつけそめて
みのみこかるゝことはまされり

右

とよぬし

770 歌合 29 二八。

770 もゆるひにみはもやすともひとこふる
むねのほのほはなほまさりけり

左

くろぬし

771 歌合 29 二九。

771 身ひとつをちゝのつるきにさすよりも
しはしものおもふことはまされり

道

右

とよぬし

177 楠

772 歌合 29 三〇。

772 かきりなきひとをわかれてまたとたに
あひみぬほとのかひはまされり

773 歌合29三二。

左

くろぬし

773

かきりなくたのむにひとのあたこゝろ
つくをおもふはなほまさりけり

右

とよぬし

774 歌合29三二。

774

わするれとわすれわひぬるひとをなほ
こひしとおもふことはまされり

みつね判す

775 歌合29三三。

775

わひしさはおもひもこひもおとらぬを
ふかきあさきのほとにやはあらぬ

朝日新聞社刊『日
本古典全書・土佐
日記』による。

一一、三月三日紀師匠曲水宴序による補遺

花浮春水

776
やみがくれ岩間を分けて行水の 聲さへ花の香にぞしみける

月入花灘暗

777
とくも入る月にもある哉山のはの しげきに影の隠るとやいはむ

遺

朝日新聞社刊『日
本古典全書・土佐
日記』による。

一二、貫之集による補遺

躬恒がもとにまかりて、つとめて、躬恒返し

778 散らぬほどに一枝もがな桜花 君がかたみに今朝みまくほし

躬恒返し

779 わが恋ひて見むとな云ひそ桜花 ふりにし雪のかたみとを云へ

一三、忠岑集による補遺

忠岑内(五〇一・
一二)を底本とし、
右に忠岑甲(五〇
〇・一二)を校合
する。

からさき

みつね

780 忠岑内 一九。

780 なみのはなおきからさきてちりくめり みつのはるとはかせやなるらん

からさきといふたいを申

ナシ甲
たゝみね

781 忠岑丙一二〇。
忠岑甲一四三。

781 い にしてわれ甲かて人これからさきにわたりけん む甲みつのうへにはあともみえぬを

うりふさか

みつね

782 忠岑丙一二一。

782 としふれとなるともみえぬうりふさか はるのかすみのたてはなりけり

つゝら お甲をり

ナシ甲みつね

783 忠岑丙一二二。
忠岑甲一四三。

783 としふれと はう甲あふともみえぬつゝら お甲をり ゆきゝのひとくれはなりけり甲はるのかすみのたてはなりけり

みつねとふ

遣

181 補

784 忠岑丙一四四。

784 こひするにきえかくる身とはるたちて ふりくるゆきといつれまされり

たゝみねこたふ

785 忠峯丙一四五。

785 こひするにきえかへるともみはうせし はるくるゆきのあととはとまるや

岩波書店『日本古典文学大系』による。

一四、大和物語による補遺

786 三三段。

786 たちよらむ木のもとなきつたの身は ときはなからに秋そかなしき

787 一三二段。

787 しらくものこのかたにしもおりゐるは 天つ風こそ吹きて來つらし

歌学大系による。

一五、俊頼髓脳による補遺

788_a おく山に船こぐ音のきこゆるは 躬恒

788^b なれるこのみやうみわたるらむ 貫之

『群書類従』による。

一六、雲葉和歌集による補遺

789 卷六和歌中「題しらす」の歌群にあり。

789 山里もうき世なれはや有明の 月もいるさにすみ馴にけむ

『歌学大系』による。

一七、類聚證に見られる躬恒歌（参考）

790 故里のあを柳こそ芽ぐみいづれ 手をだに触ればふしきしぬべし

791 白雪の降りはつめども消えもせで 春の柳は萌出でにけり

朝日新聞社刊『日本
古典全書・古本
説話集本朝神仙
傳』による。

第二十三の全文を
掲げる。

一八、古本説話集に見られる躬恒歌（参考）

今は昔、躬恒みつねがもとへ、ひとの「來こむ」と言ひて來こざりければ、

またの夜、月の明あかかりけるに、つかはしける、

792
てふらなる月もながめじもさなきに　ようべ來こぬこそしこらつられ

これも東人あづまうどの眞似まねにや。

〔参考〕躬恒集甲本（書陵部蔵五〇一・三〇六）跋文

かみけかしにもとおもたまへなからいなひとかやな又なからむのちの方々におもひさふら
ひてこそみつくきのあとかきつくるしにはなかれてさそとおもひいてなむかし

諸本歌順異同一覽表

13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	校本 歌番号
13	12	11	10	9	8	7	6	5	4 (273)	3	2	1	底 (桂)
													備考
196	195	194	193	192	191	190	189	188	187	186	185	183	乙
									427				西・連
192	191	190	189	188	187	186	185	184	183 297	182	181	179	禁
192	191	190	189	188	187	186	185	184	183 296	182	181	179	御
49	48	46	45	43	3	42	2	44	1		4	122	歌
								198	88	263		179	内
12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	219	甲

26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	校本 歌番号
26 (208)	25 (207)	24 (206)	23 (224)	22	21	20	19	18	17 (270)	16	15	14	底 (桂)
													備考
113	112	111	125 205	204	203	202	201	200		199	198	197	乙
458	457	137	470	15	14	13	12	11					西・連
109	108	107	121 201	200	199	198	197	196	294	195	194	193	禁
109	108	107	121 201	200	199	198	197	196	293	195	194	193	御
			57 96	56	55	54	53	52	165		51	50	歌
125	124	123	137						196				内
191	190	189	22 199	21	20	19	18	17	16	15	14	13	甲

38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	校本 歌番号
38 (212)	37 (42)	36 (225)	35	34	33 (211)	32 (210)	31 (205)	30 (204)	29 (62)	28 (213) (295)	27 (209)	底 (桂)
												備考
121	119 208	118	117	116	115		110	109	155 169		114	乙
466	20 464	463	462	461	460		456	455	454	313 453	459	西・連
117	115 204	114	113	112	111		106	105	151 165	319	110	禁
117	115 204	114	113	112	111		106	105	151 165	318	110	御
	63	102	99	97					94			歌
133	131 280	130	129	128	127		122	121	120	119 165	126	内
195	28	205	202	200	194	193	188	187	48	196	192	甲

50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	校本 歌番号
50	49	48	47	46	45	44	43	42 (37)	41	40 (384)	39	底 (桂)
								重37 出と				備考
157	214	213	212	211	210	209	120		207	182	206	乙
	27 414	26 413	23 411	22	25 412	24	465	(20) (464)	18	17 134	16	西・連
153	210	209	208	207	206	205	116	(115) (204)	203	178 408	202	禁
153	210	209	208	207	206	205	116	(115) (204)	203	178 407	202	御
71	70	69	68	67	66	65	64	(63)	60	59	58	歌
229		276					132	(131) (280)				内
36	35	34	33	32	31	30	29	(28)	26	24	23	甲

189 諸本歌順異同一覧表

64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51
64	63	62 (29)	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51
		重29 出と											
171	122 170		168	167	166	165	164	163	162	161	159		78 158
	467	(454)					385						429
167	118 166	(151) (165)	164	163	162	161	160	159	158	157	155		78 154
167	118 166	(151) (165)	164	163	162	161	160	159	158	157	155		78 154
7	5	(94)	93	92	91	90	89	80	78	77	74		72
	134	(120)	206		143		40		282	300			90
50	49	(48)	47	46	45	44	43	42	41	40	37		38

78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65
78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65
217	216	215	181	180 b	180 a	179	178	177	176	175	174	173	172
			133	132 b		132 a	131	130					
213	212	211	177	176 b	176 a	175	174	173	172	171	170	169	168
213	212	211	177	176 b	176 a	175	174	173	172	171	170	169	168
118	117	116	115		114	16	15	14	13	11	10	9	8
								297			285		
63	62	61	60		59	58	57	56	55	54	53	52	51

91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	校本歌番号
91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81 (337)	80	79	底 (桂)
													備考
142		141	140	139	138	136	135	148	147		219	218	乙
	144	152 482	101 481	480	304 479	303	478	6	5	4			西・速
138		137	136	135	134	132	131	144	143	361	215	214	禁
138		137	136	135	134	132	131	144	143	360	215	214	御
26	[257a] [325b]	22	25	24	23	21	20	19	18	17	120	119	歌
261		199	234			200	302	231		303			内
74		70 b	73	72	71	70 a	69	68	67	66	65	64	甲

104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	校本歌番号
104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	底 (桂)
													備考
8	7	6	5	4	3	2	1		146	145	143	144	乙
355	354	353	352	351	350	349	348			155	154		西・速
8	7	6	5	4	3	2	1		142	141	139	140	禁
8	7	6	5	4	3	2	1		142	141	139	140	御
39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	歌
8	7 208	6 286	5	4	3	2	1		207		232 b		内
87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	甲

191 諸本歌順異同一覽表

118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	105
118	117 (242)	116	115	114	113	112	111 (238)	110	109	108 (241)	107	106 (234)	105
11	24		23	22	21	20		19	137		18		9
	373		372	371	370	369	368	367	119 366	365	364	357	356
11	24 266		23	22	21	20	262	19	133	265	18	258	9
11	24 266		23	22	21	20	262	19	133	265	18	258	9
													40
36	35 142		34	33	32	31	30	21	20 201	19	18	10	9 232 a
108	107	106	105	104	103	102	101	100	99	98	97	90	88

132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120	119
132	131	130	129	128	127	126	125	124	123 (240)	122 (243)	121 (239)	120	119
31	80	30	29	28		27	13			12		26	25
388	387	386	384	383	382	381	380	379	378	377	376	375	374
31	80	30	29	28		27	13		264	12 267	263	26	25
31	80	30	29	28		27	13		264	12 267	263	26	25
					81								
43	42	41	39	38	29	28	27	26	25	24 141	23 184	22	37
122	121	119	120	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109

145	144	143	142	141	140	139	138	137	136	135	134	133	校本歌番号
145	144	143	142	141	140	139	138	137	136	135	134	133	底(桂)
													備考
44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	乙
398	397	396	395	394	393	392	391			140	390	389	西連
44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	禁
44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	御
													歌
56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46 228	45	44	内
135	134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	甲

158	157	156	155	154	153	152	151	150	149	148	147	146	校本歌番号
158	157	156	155	154	153	152	151	150	149	148	147	146	底(桂)
													備考
57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	乙
407	406	405	404			403	402	401	400		399	430	西連
57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	禁
57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	御
									79	73			歌
68 301	67	66	65	64	63	62	61	264	60	59	58	57	内
148	147	146	145	144	143	142	141	140	139	138	137	136	甲

172	171	170	169	168	167	166	165	164	163	162	161	160	159
172	171	170	169	168	167	166	165	164	163	162	161	160	159
72	71	70	69	68	67	66	65	64	62	60	61	59	58
422	421	420	419	308	307 418	417	294 416	415	409	88	408	77 147	78
72	71	70	69	68	67	66	65	64	62	60	61	59	58
72	71	70	69	68	67	66	65	64	62	60	61	59	58
83	82	81	80	79	78 273	77	76	75	73	71	72	70	69
162	161		160	159	158	157	156	155	153	152	151	150	149

185	184	183	182	181		180	179	178	177	176	175	174	173
185	184	183	182	181 (294)		180 (250)	179	178	177	176	175	174	173
				合成の二首									
90	89	88	87	86			81	79	77	76	75	74	73
437	436 b	436 a	435		434		432	431	428	426	199 425	424	423
90	89	88	87	86	318	274	81	79	77	76	75	74	73
90	89	88	87	86	317	274	81	79	77	76	75	74	73
											302		
102	101	100	99	98	97	96	92	91	89	87	86	85	84
170							168	197	167	166	165	164	163

198	197	196	195	194	193	192	191	190	189	188	187	186	校本 歌番号
198	197	196	195	194	193	192	191	190	189	188	187	186	底 (桂)
													備考
184	82	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	乙
	433	447	446	445	444	443	442		441	440	28 439	438	西・ 連
180	82	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	禁・ 乙
180	82	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	御
121													歌
	93	113	112	111	110	109	108	107	106	105	104	103	内
218	169	181	180	179	178	177	176	175	174	173	172	171	甲

211	210	209	208	207	206	205	204	203	202	201	200	199	校本 歌番号
211 (33)	210 (32)	209 (27)	208 (26)	207 (25)	206 (24)	205 (31)	204 (30)	203 (296)	202	201 (290)	200 (288)	199	底 (桂)
重33 出と	重32 出と	重27 出と	重26 出と	重25 出と	重24 出と	重31 出と	重30 出と						備考
(115)		(114)	(113)	(112)	(111)			106	105	104	103	102	乙
(460)		(459)	(458)	(457)	(137)	(456)	(455)	452	451	450	449	448	西・ 連
(111)		(110)	(109)	(108)	(107)	(106)	(105)	320	104	314	103 312	102	禁
(111)		(110)	(109)	(108)	(107)	(106)	(105)	319	104	313	103 311	102	御
													歌
(127)		(126)	(125)	(124)	(123)	(122)	(121)	118	117	116	115	114	内
(194)	(193)	(192)	(191)	(190)	(189)	(188)	(187)	186	185	184	183	182	甲

225	224	223	222	221	220	219	218	217	216	215	214	213	212
225 (36)	224 (23)	223	222	221	220	219	218	217	216	215	214	213 (28) (295)	212 (38)
重36 出と	重23 出と											重28 出と	重38 出と
(118)	(125) (205)	149	132	131	130	129	128	127	126	124	123		(121)
(463)	(470)	7	476	475	10	474	473	472	60 471	469	468	(313) (453)	(466)
(114)	(121) (201)	145	128	127	126	125	124	123	122	120	119	(319)	(117)
(114)	(121) (201)	145	128	127	126	125	124	123	122	120	118	(318)	(117)
(102)	(57) (96)	107		106	105	104	101	100	98	103	95		
(130)	(137)	296				237	140	139	138	136	135	(119) (165)	(133)
(205)	(22) (199)	211	210	209	208	207	204	203	201	206	198	(196)	(195)

239	238	237	236	235	234	233	232	231	230	229	228	227	226
239 (121)	238 (111)	237	236	235	234 (106)	233	232	231	230 (286)	229 (297)	228	227 (372)	226
重121 出と	重111 出と				重106 出と								
			14					134					133
(376)	(368)	359		360	(357)			266					477
(263)	(262)	261	14 260	259	(258)	257	256	130	310	321		396	129
(263)	(262)	261	14 260	259	(258)	257	256	130	309	320		395	129
								113	112	111	110	109	108
(23) (184)	(30)	12	14	13	(10)	183	181		160	167	171	168	255
(111)	(101)	93	92	91	(90)			217	216	215	214	213	212

197 諸本歌順異同一覧表

279	278	277	276	275	274	273	272	271	270	269	268	267	266
279	278	277	276	275	274	273 (4)	272	271	270 (17)	269	268	267	266
						重4 出と			重17 出と				
						(187)							
				53		(427)	47	107			32		
303	302	301	300	299	298	(183) (297)	296	295	(294)	293	292	291	290
302	301	300	299	298	297	(183) (296)	295	294	(293)	292	291	290	289
166				190		(1)	179	169	(165)	164	130		
197	176	175	174	173	172	(88)	214	213	(196)	195	235	155	154
						(3)			(16)				

293	292	291	290	289	288	287	286	285	284	283	282	281	280
293	292	291	290 (201)	289	288 (200)	287	286 (230)	285	284	283	282	281	280
			重201 出と		重200 出と		重230 出と						
			(104)		(103)								
			(450)		(449)								
317	316	315	(314)	313	(103) (312)	311	(310)	309	308	307	306	305	304
316	315	314	(313)	312	(103) (311)	310	(309)	308	307	306	305	304	303
							(112)						
192	161	162	(116)		(115)	182	(160)	178	177	159	158	157	156
			(184)		(183)		(216)						

306	305	304	303	302	301	300	299	298	297	296	295	294	校本歌番号
306	305	304	303	302	301	300	299	298	297 (229)	296 (203)	295 (28) (213)	294 (181)	底 (桂)
									重229 出と	重203 出と	重28 出と	重181 出と	備考
										(106)			乙
	196	55								(452)	(313) (453)	(434)	西連
330	329	328	327	326	325	324	323	322	(321)	(320)	(319)	(318)	禁
329	328	327	326	325	324	323	322	321	(320)	(319)	(318)	(317)	御
	299	186		163					(111)				歌
180		230	170	193	169	166	164	163	(167)	(118)	(119) (165)	(97)	内
									(215)	(186)	(196)		甲

[illegible]

333	332	331	330	329	328	327	326	325	324	323	322	321	320
333	332	331	330	329	328	327	326	325	324	323	322	321	320
357	356	355	354	353	352	351	350	349	348	347	346	345	344
356	355	354	353	352	351	350	349	348	347	346	345	344	343
					284							270	240

347	346	345	344	343	342	341	340	339	338	337	336	335	334
347	346	345	344	343	342	341	340	339	338	337 (81)	336	335	334
										重81 出と			
				328	238	236	89			(4)			
371	370	369	368	367	366	365	364	363	362	(361)	360	359	358
370	369	368	367	366	365	364	363	362	361	(360)	359	358	357
					148	146 b	215			(17)			
			205						186	(303)			291
										(66)			

[illegible][illegible]

201 諸本歌煩異同一覧表

387	386	385	384	383	382	381	380	379	378	377	376	375	374
			384 (40)	383	382	381	380	379	378	377	376	375	374
			重40 出と										
			(182)										
3	2	1	(17) (134)		105	201	58	30	45	284	281	50	51
			(178) (408)	407	406	405	404	403	402	401	400	399	398
			(178) (407)	406	405	404	403	402	401	400	399	398	397
	124	123	(59)		229	304	189	128	177			182	183
						281	268				292	272	290
			(24)										

401	400	399	398	397	396	395	394	393	392	391	390	389	388
220									83				
40	39	38	37	36	35	34	33	31	29	21	19	9	8
216									83				
216									83				
172	171	[135a] [170]	134		133	132	131	129		62	61	127	126
									94				
										27	25		

[illegible][illegible]

[illegible][illegible]

[illegible][illegible]

[illegible][illegible]

[illegible][illegible]

[illegible][illegible]

[illegible][illegible]

211 諸本歌頌異同一覽表

652	651	650	649	648	647	646	645	644	643	642	641	640	639 b
223	222	160	156	154	153	152	85	84	63	17	16	10	
									410	363	362	358	347 b
219	218	156	152	150	149	148	85	84	63	17	16	10	
219	218	156	152	150	149	148	85	84	63	17	16	10	
168		76			125							41	
216	215		151	150	149	245		95	74	17	16	11	
		39							154	96	95	89	

[illegible]

706	705	704	703	702	701	700	699	698	697	696	695	694	693
				326	282	88	87	86	85	84	83	82	75
211	204	194	187	274				258	298	265			236

〔注〕

- 1 菊地肇彦氏の説『和歌文学研究』第二十九号「躬恒・忠岑・伊衡問答歌について」に従い、拾遺集五一九番歌を補った。また、内本二二一番歌は、拾遺集五一九番歌と同一歌であるので、ここに記した。
- 2 菊地氏の説（前掲の論文）に従い、忠岑集丙本一三三番歌を補った。

714	713	712	711	710	709	708	707
299	295	293	288	259	256	238	227